いらつめ

第二十七號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十七號目次（明治二十二年九月十五日發兌）

挿　畫

○睦しく花を玩ぶ圖

家　政

○室內粧飾法床の間の飾方（前號の續）

○看病法　（前號の續）

○子供の扱ひ方……………ふ、ないちんげエる孃述

○昆布を早く煮る法

○布に付いた澁を落す法

○膠で物をついで離れぬやうにする法

流　行

○足袋をはかぬ新流行

○大形の紋の流行

○此冬流行の織物

○此冬の蝙蝠傘

○ふだん猫

文藝美術

○唱歌作方初學

○日光紀行…………………………（佐々木信綱）

○しるれる作野邊にくりの歌の解（や。た。）

○紙屑籠………………………（おもしろ瓢仙）

○內閣官報局新定送假名法（前號續）

○日よりも月

批　評

○紅葉山人のやまと昭君細評　（美妙齋主人）

○女子の務

○看護婦教程

○辭書に無い解釋

文　藝

○第三回懸賞文藝　俳句　和歌　今様　文章の得賞者

○第六回懸賞文藝

雜　纂

○米國婦人職業概況

○煙草をきらふ文學者

○外國婦人間喫烟の流行

○馬鹿箇條書

○露國婦人の狀况—、（ら、ちやアちる令夫人記）

○象の記臆力

○最上小說十種

○淑女の流行言葉を用ゐる可否

○實情から出た歌

寄　書

○暦法の質疑……………………（司馬あや子）

○望江南の種の分與を報ず……（案野たみ子）

答　書

○二十六號疑問の解答

○蜜柑を翌年の春迄貯へる法（五法）

○蟻のひらへ上らぬ法（五法）

○手の座敷の豆を去る法（三法）

○板に付いた澁を落す法

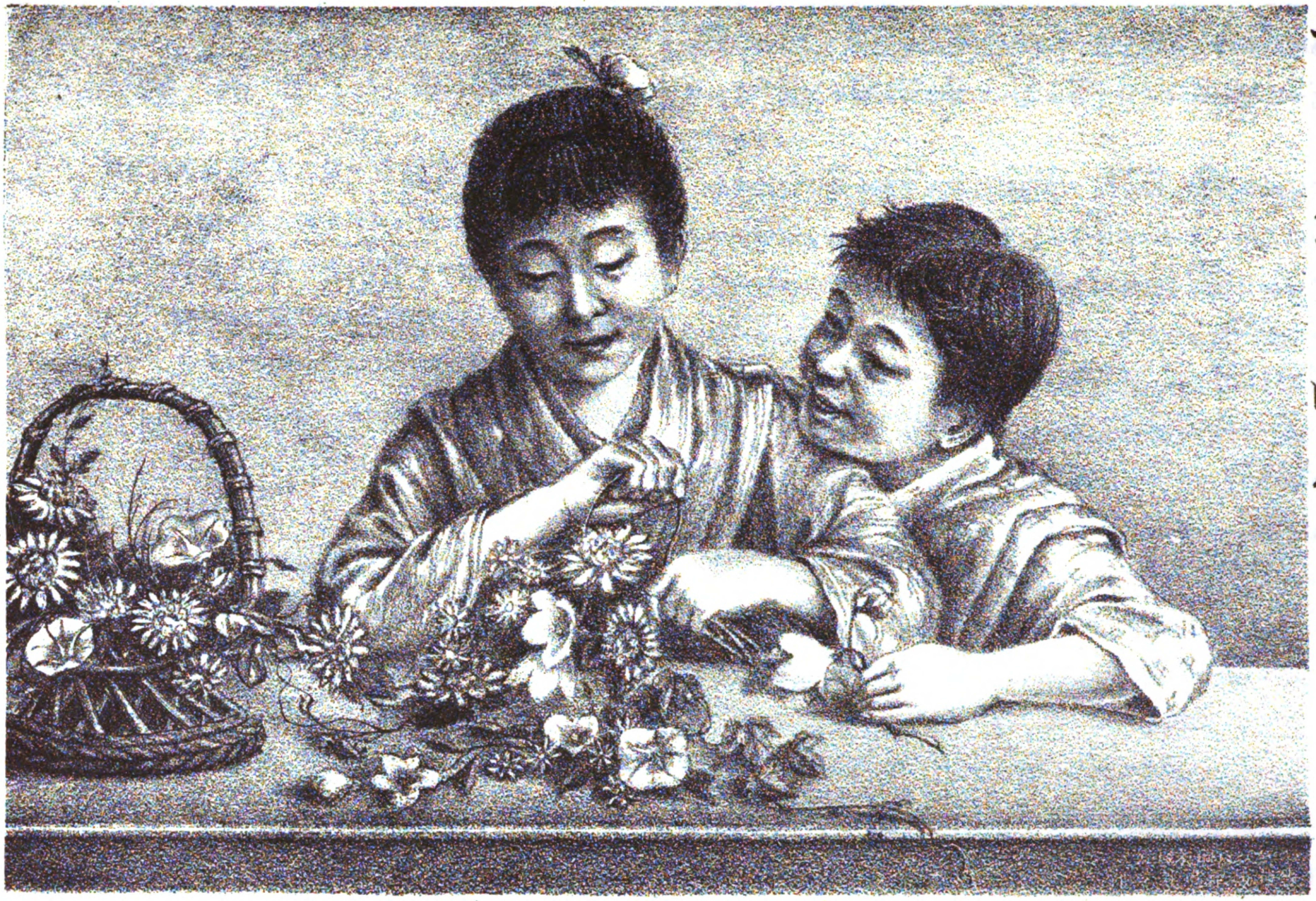
通信問答

○衣服に付いたペンキを落す法‖ニキビを豫防する‖酒を飲んで居睡をせぬ法‖蚊を驅除する法‖源氏物語つれ〲草榮花物語枕草紙の直段‖近眼を豫防する法‖和歌獨習には何がいゝか‖洋服裁縫書について‖縮れ髮を直す‖簡便晴雨計製法‖庭石に苔を付ける法‖沃度加里の効能‖日に燒けたのを落す‖脫けた髮を恢復するの‖懷姙避姙の時期‖胃病を防ぐ法‖布の染色の落ちぬ法‖漆に負されたのを治す法‖毛を生す法‖眞鍮の欣製法‖英語獨習にいゝ雜誌‖衛生家政の書物‖目の養生にいゝ目鏡の色‖動詞變化が簡略に知れる日本文法書‖世界第一白色繭法‖疊へついたインキを落す法‖晴雨計かんざし‖汗を止める可否‖身體肥滿を防ぐ法‖喉の赤いのを直す法‖火傷ではげた處へ毛を生す法‖櫻花の色を變らせずに漬ける法‖紙を損つて離れぬ法‖毛を拔去る法‖疑問四件（烟管をキセルといふ意味‖龜井戸葛餠製法‖蒸羊羹製法‖油虫を除く法）

新案別製本出版の社告

度々の御忠告により第廿六號からいらつめ別製本を作り、永く保存に堪へるやうにしました。（一）別製本には優美な色刷の表紙を付け、美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）從來のいらつめ通りの製本は今後並製とする事（三）すべて別製は美麗堅牢を主とし、並製は實用を主とする事（四）別製は容易に再板せぬ事ゆゑ御注文は至急でなければ賣切になり、賣切後は手易く手に入らぬ事（五）別製並製とも記事は相同じである事（六）並製の代價は從前の通りである事（七）別製代價は一冊九錢、郵稅共十一錢。半年分（六冊）五十錢、郵稅共六十二錢。一年分（十二冊）九十錢、郵稅共一圓十四錢。見本は一錢郵券十一枚領收の上送る事（八）第廿六號別製本悉皆賣切の事。

八月十六日から九月十日迄に添削を乞はれた草稿。一、教師（小說、著者紳士）。二、波のまに〱（小說、著者紳士）。三、浮寐鳥（小說、著者淑女）。



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十七號

家政

室内粧飾法床の間の飾り方（廿五、廿六號のつゞき）

（花と壁と見合はせる事＝花を花瓶の色と見合はせる事＝花を床づくりと見合はせる事＝床づくりの色と花の色とを見合はせる事＝床の木と草木とを見合はせる事＝床木の種類＝粧飾的意匠から論じて日本花瓶と西洋花瓶との相違＝花を害する花瓶＝花瓶と花の位置との關係）

壁色と見合はせる事。　花を壁色と見合はせる事、これも床の間の飾り方に於て肝要な事です。　掛物を壁色と見合はせる事に就ては前々號ですこし注意を述べました。　それと同じことで、今花を壁色と見合はせる段に於ても唯色の配合の原理を應用すればそれで宜しいので、そして最も便利なのは總べて床壁の色は間色が多く、赤とか、白とか、黄とか、單純な一色のものは少ないことで、大抵そこしぐらゐの不配合でもよく受けます。　色の配合に於ては女性の方々は中々敏捷なもので、今記者が事あたらしく述べるまでも有りませんが、猶さら迷ふ方も有らうかと考へて、すこしばかり記しましやう。

まづ壁色で最も便利なのは焦茶色、玉子色、水色などで、およそ是等へなら大抵の色の花はよく映ります。　しかし同じよく映るといふ内にも多少の優劣の有るのは當然の事で、その優劣の有るのは即ち實によく映ると映らぬと其土臺の性質が相違して居るからです。　焦茶色に最もよく映るのは緑、桃、白、猩々緋、薄紫の類でそれゆゑ焦茶色の壁の前には生葉の草木を置いてもよく、乙女椿を置いてもよく、白の花菖蒲を置いてもよく、檜扇百合の類を置いてもよくまた藤を置いても差支ありません。　次は玉子色、これは既に薄黄色になつて居ますから薄黄または黄の花は似合ひません。　それ故にこの壁の前に山吹、連翹などを置くのは最も不風流なことでたゞよく映るのは紅、白、桃、紫、青などの類です。　次に水色、これは空色、すなはち薄青、俗に縹色など言ふのは似合ひません。　似合ふのは白、紅、紫、黄などの類です。

この外に壁の色もいくらも有ります。が、つまりこの例を

推して、なるたけ色の似通つたのを避ければ宜しいのです。

花瓶の色と見合はせる事。　花と花瓶との關係に就いては餘程以前のいらつめで論じたことも有りました。　つまるところ前の床壁の色と花とを見合はせる、その理によつて宜しいのです。　から、別にくだくだしく說明しません。

床づくりと見合はせる事　花を床づくり（解はいらつめ第二十五號にある）と見合はせる事については其處に二ヶ條あつて、すなはち其一は床づくりの色と花の色とを見合はせる事、其二は床の木と草木とを見合はせることです。　床づくりの色と花とを見合はせる事はやはり前々のとほり色の配合を考へるだけで宜しいのです。　が、床の木と草木とを見合はせる方はそれと違ひ、一寸氣のつかぬことで、すなはち床の木と草木と同じ物を避けることです。　で、その避け方よりも一寸注意が有ります。

床づくりの木は大抵極ツたもの、即ち、赤味柾目の杉、同く檜、紫檀、黒檀、檳榔子、たがやさん、黒柿、桑、唐桑、掠、百日紅、神代杉、如輪目の欅、松などの類で、これらの中、日本にあるのもあり、無いのもあり、有ツても澤山でなくては無いなど、言ふのもあり、隨ツて挿花にこれらの木を用ゐる事も少い樣なもの、併し時にはまた有る、その時注意しなければ爲りません。　で、もし床の木と同じ盆栽でも床前に置くことが有ツたなら、大抵は避けなければ爲らぬことです。た、もし床柱が百日紅ででも有ツてそれで挿花に百日紅でも用ゐる時にあたり（挿花の百日紅がさながら床柱の百日紅から出た一枝ででも有るやうに見せれば却つて非常な巧みを得る譯になります）。　それ故に、これらは熟練の爲る仕事です。いたづらに巧みを競ふと、飛んだ失策を招きます。

次に花の活け方、これは一派の專門となつて居る程有つて手やすく言ひ盡くせませんから茲には省き、門をかへて述べる事とし、これからは直に花瓶に關係する注意をすこし述べましやう。

今日は昔とちがひ、歐米製の花瓶も均しく日本製のと共に用ゐられます。　が、双方各ちがつた意匠で出來て居るからには自然それと花との取り合はせ方に於ても双方殊ならなくては爲らぬ事です。

粧飾的意匠（デコレチーヴ、デザイン）から言へば歐米のは規則立つた中に美を求める類で、日本のはまたそれと反對です。　それで時によると歐米の花瓶はむしろ花の美を奪ふほどの美を花瓶

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の方で爲して居ます。
花瓶と言ふからは花瓶それ自身の形及び摸様などが不條理で有ッてはならぬのは無論の事ですが、しかしまたそれが花と相對する點に於て花の害を爲すのは言ふまでも無く取るに足らぬ、もつとも陋しむべきことです。畢竟花の多數はあざやかな色を持つもの、で、花瓶がそれを犯すほどにあざやかな色であるのは忘れても顧るものでありません。色ばかりか肝要なのは花瓶の摸様です。花や草を象ッて、しかも一目見てそれとわかる、複雑な摸様の花瓶も、よく賣ッては居ますが、實に品の無いいたりです。
兎に角、それゆゑ、花瓶はなるたけ花を犯さぬやうなのが望ましいです。そして、花器、すなはち凡そ花を立てる器にも高い處に置くのとまた低いところに置くのと二種ありその工合によッて花も相違させる事、この點に於ては西洋人は間々無鑑識ですが、もつとも注意を要してよろしいのです。すなはちそれは外でも無く、高いところには高くさしてる花や木をさし、低いところには低く生へるものをさすことです。たとへば、櫻、柳などは高くさしで居るもの、それゆゑ、これらは高い處へさし、また石菖や、紫陽花などは低く生へるもの、それゆゑこれらは低いところへさすのです。間々低く生へるものを高く挿す事も有ります、が、その時には挿方が有ります。それはまた別の場合で言ひましやう。

看病法一斑（廿二、廿六號から續く）　ふ、ないちんげエる孃述

子供取り扱ひ方

さて今度は阿孃さまがたに御話しが有ります。貴女がたでも私でも子供をば澤山取り扱ひました、たとひ其子は自身の生んだ子でないにしろ。そして今まで私は通常の看病婦の心得について色々述べた、その末今度は局面をあらためて專ら阿孃さま方の御厄介になる赤子の事に說き及ぼす、その子細は赤子の方が却ッて大人より取り扱ひが六づかしいためです。たとへば年を取ッたものには何とも思はれぬ事が赤子には大層感じる、この類がもつとも多いことです
赤子は阿孃さま方よりも新らしい空氣をば盛に好むもので、したがッて皆さまより早く暑さ寒さを感じるものです。それからまた赤子は清潔にされぬため苦しむ事が有ります（生温い湯をつかはせると如何にも嬉しさうであるのを御覽なさい）。また赤子は衣物や寢衣が度々はやくかはるの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と皆さまより望みます。　また赤子はむさい處をば皆さまより嫌ひます。　それらの點の重なところを是から箇條別けにして見ましやう。

赤子の着物は暑過ぎず、また寒過ぎぬやうに爲ること。

赤子が寢る間も同斷。

不意に高い物音を起して赤子をおどろかせぬ事。　これがもつとも肝要で、いはゆる驚風で赤子が死ぬのも原因は此處に多くあります。　高いくさめ、手あやまち、響きなど殊につゝしまなければ爲りません。

赤子に物を食べ過ぎさせ、また不足にするのを避ける事。

赤子の食を過ぐさせると胃病を起させ、不足にすると疲勞をもよほさせます。　いづれも注意が肝要です。　ことに其食物の中でも味の強過ぎるものはわるいです。　たとへば、鹽辛い物（鹽引鮭の類）、甘過ぎる物（羊羹、菓子の類）、酸過ぎる物（梅干、朱欒の類）、または油濃いもの（天麩羅の類）、　その他不消化の物はいづれも食べさせぬやうにするのが宜しいです。　苦いもの、辛いもの、澁いものなどは赤子が元々好みませんから、強ひて與へるにも及びません。　あるべく味も淡泊で、消化もよく、胃に刺激を起さぬものを擇んで與へる事です。

赤子には繪具の類を注意して與へぬ事。　手遊物は赤子の心をたのしませるものゆゑ、かならず奇麗にいろどつて有るのが多いです。　が、この繪具といふものは多く恐るべき、有害の物で、そして赤子は何をでも大抵口で舐るものですから、わるい繪具を呑込むことが度々有ツて、それから死ぬ事も起ります。　これは極めて肝要の注意です。

鎔け易くない物を赤子には食べさせぬ事。　赤子は兎角よく物を口でこなさずに呑み込むもので、それ故、輕燒のやうな、解け易いものは鵜呑みにしても宜しいですが、鐵砲玉のやうな、解け難いものは胃を害します。　胃を害すならまだ害はわづかなのです。　時にそれが咽喉につかへてそれがため呼吸が止まツて死ぬことさへ有ります。

飢ゑた赤子には幾度にもわけて些しづゝ食物を與へること

母親など時にいそがしさに紛れて子の腹を減らせ、それから一度に乳なり、食物なり、澤山飲ませたり、食べさせたりする、それが甚だわるいのです。　ある婦人が外へ出る用事が有るとて三度分の乳汁を一度に赤子に飲ませ、そして出て行つて、歸ツて見ると赤子は恐ろしく胃を損じてしまつて居た

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事、これは私が現に見ました。何でも飢えさせるのも悪いですが、また盛り過ぐすのも宜いとは言へません。もし飢えさせた事が有つたなら、仕方がありません、それから食を與へるにもよく見料らひ、たとひ赤子が食るとも決して一度に澤山やらず、いくたびにもわかつてすこしづゝ遣るものです。

抱きかゝへるばかりが子育の法で無いこと。人に因つては育兒法の理を知らず、たゞ赤子をあらい風にも當てず、また手からも放さず、家の中にのみ保護して置くのを最上の手段と考へるものも有りますが、これでは又子供を弱くしてしまひます。なるほど、家の外には熱い日もあり、寒い雪もあり、多少子供の害になるものも有りますが、しかしまたそれをいくらか凌ぐ習慣をも子供に付けなければならぬ事です。天氣の樣子がおだやかであツたなら少しは外で遊ばせるのも子供に活潑な風を與へる原因で、そして子供もまた嬉しがるものです。

（未完）

昆布を早く煮る法

昆布を煮るにはまづ酢をすこし入れて煮るのに限りまそ。おどろくほど早く煮えてそして味もかはりません。

忍冬酒製法

胃弱の人にいゝ酒は忍冬酒です。その製法は六かしくも有りません。忍冬二十匁、紅花六匁、肉桂の粉一匁、丁子の粉一匁、ミキユー（味淋でもよし）一升、燒酎一升、及び角砂糖七匁。この七種を混ぜ合はせ、瓶に入れて口を密封して置くのです。冬は三週間、春秋は二週間、夏は一週間で飲めるやうになります。

布に付いた澁を落す法

燈心を燒き、その灰で洗ふのがよろしいです。

膠で物をついで離れぬやうにする法

萬年青の根を黒燒にし、適宜に膠へ煉り交ぜ、そして接ぐのです、決して離れません。

流行

足袋をはかぬ新流行

古老のはなしによれば昔は婦人で足袋をはくのは先少いとも言ふべきほどで、却ツてまた西鶴の織留に見える美人の時代、天和慶長から先祿前後の頃には鹿の革足袋などはいて居

たその事です。これは其頃の風俗をしらべれば直にわかることですが、一時天保頃を盛とし、一般に足袋を用ゐぬ風習が行はれて居ましたが、この明治十年を境とし、更に近頃に至るまではまた足袋が行なはれ、どんな下賤な婦人でも外出には大抵これを用ゐるといふ風でした。ところが又この二三ヶ月このかたは又從來の風が一變して、婦人の足袋（男子のも勿論）すたれた方にありました、その風がはじめて東京にあらはれたのは此年の二三月頃の間で、この頃記者はそれを以て一種の變体と考へ、つや〳〵心にも注めず、それから夏になるに從ひ、いよ〳〵其數の増すのに遇ッても是は例年の常、たゞの時候のためと輕々しく斷じて居ました。がこの考へは全くちがッて、もはや冷氣も催して來ましたが、しかしこの新流行は中々おとろへず、否、却ッて進む勢です近頃交際社會で可なり名のある何某令夫人は先々月の事でした、どうしたことか、これには些しも心が付かず、やはり毎もの風で絹の足袋で一寸した、小人數の宴席に出られましたもつとも其時の宴席は日本風の場處では有りましたが、しかも其處に居合はされた五六の貴婦人たちは過半すでに足袋無しであられた、その体を見て前の令夫人は大に不思議に思はれ、そのまゝにして居ると、片々ではまた頻りに令夫人の足に目を付けられる樣子、それで、さすがの令夫人のことゆゑさてはと悟り、直に別間へ退いて脱ぎ捨てゝしまはれましたので其場はやうやく繕へたといふ程です。

で、この流行の起りは單に復古したのか、それとも外に子細が有ッてか、二つの中そのどちらにあると、委しく調べて見ると、實に其原因が無くも無く、極めて些細の事から復古の考へにも助けられ、物珍らし好きの心にも催され、終に斯うあらはれて來たので、すなはち何某といふ華族の令孃が他に俊れて美くしく、白い足を持つ、そのために起ッたのです。かそかに洩れて聞くところによれば今年一月の末の頃、麴町區のある華族の邸に祝宴があッて、藝妓をも呼ばれた時、令孃はその席へわざと足袋なしで列られました。なぜ左樣したかと言ふに、名前は省きますが、この令孃は天質はなはだ色白ではあるものゝ、唯一つの瑕は顔があまりうるはしくなく、それをある貴婦人が嘲ッて評した事のある、それで其日はその貴婦人も列席されるのを機會にわざと人の及ばぬところ、すなはち絹のやうに滑で、かつ麗しい足首を見せられたので、口にこそ出しませんでしたが、一座大きにそのう

るはしいのに驚き入り、令孃の起居に始終目を付けるものばかりでありました。で、それが恐ろしく藝妓の心に入りました。 それから未だ寒い時候をも構はず、その藝妓がたの後令孃の顰にならひ、全く足袋なしで座敷へ出るやうになりさてそれからそれへと移り／＼て終に今日の有樣とまでなッたことです。 すこしは西施東施のに以て居ますが、しかし實説には違ひないとの事です。

原因はこれだけで、敏捷な令夫人や令娘の方々の中には既にこの流行に從ッて居られる方もありましやう。 これから時候ハ寒くなるところ、多少この新流行の力を殺ぐかも知れませんが、また思ひ直して見ると、隨分流行の勢力は寒暑ぐらゐは恐れずに進むものですから、或は猶ます／＼行はれるかも知れません。

記者はこの流行の善惡につき、別に深い考へをも持ちません。 しかし公平に評せば言ふまでも無く、足袋のあるのは眞面目で、その無いのは粹に過ぎて居ます。 多少足袋の有るのも却ッて戯れた意味を含む塲合もありましやう。 が、どちらかと言へばいやしくも淑女と言はれる方はどうかこの粹に走ッてた風に染まず、やはり高尚に、清淨な白足袋を御着けになッた方が操の上につきもつとも望ましいことです。 人の玩弄物となる藝娼妓は何うでも宜しいのです。 その風が其まゝ淑女に移るのはまづ以ての外の事です。

大形の紋の流行

いらつめ方は是からの移りかはりに臨み、新に紋付を御注文になる事でしやう。 しかし、もし在來の流行を墨守して新に猶小形の紋を御付けになると或は後悔なさる事も有るか知れません。 今日のところではまだ／＼紋の大形なのが流行しはじめました。 まだ勢は微弱です。 が、小形紋も久しく行はれて居て、人も大方新奇を望み出した時、恐らくは復古の大形の紋がます／＼行はれるやうになりましやうか。

元來流行といふものは餘程妙なもので、道理ハ無く、たゞ色々循環して体面を更へるのが多いもので、それ故、今度の大形の紋の流行などもたゞそれだけの理であらはれたのです。

此冬流行の織物

この冬流行せる見込の十分有る織物は左のとほりです。

一　安積ちりめん。 まだ價は分かりませんが、今月下

旬か、來月上旬には大きな呉服屋で賣り出します。 これが珍らしくて最も新奇と思はれて流行しましやう。

二　秋田八丈。 小巾は一疋六圓、大巾は八圓、中等品はや、廉價です。

三　本御召。 例年に價は多くかはりません。

この餘は米澤、糸織、南部、いづれも例年のとほりです。

此冬の蝙蝠傘

冬は小形蝙蝠傘をさすのが一寸貴婦人間の流行です。

蝙蝠傘はゴム絞が最上の流行、二重海氣は全くの無勢力、物はパチ無しの鉄柄、または黒檀柄。

ふだん猫

「もしいつぞや御願ひ申して置いた猫は生まれましたか」。「はイ生まれました、 これでございます」。 「は、ア、いや、しかし是は恐ろしく穢ならしい猫でございますな」。「はイ」。 「もすこし奇麗なのはムいませんか」。 「いえ、唯今はどうも。 しかし、宜しうムいます、かう成さいまし、その猫のかはりにまた今度生まれましたら奇麗なのをば撰つて差し上げましやう。 たゞ今のその猫は不斷猫に成さいませ」。

文藝美術

唱歌つくり方初學

かねて唱歌つくり方を掲げる旨を言つたまゝ、大に遲延しました。 が、原稿も取り揃ひましたから今度から掲げることゝ爲ました。

さて唱歌といふものは今日にはじまツた物では無く、むかしから有りました。 むかしの唱歌は今日の唱歌と意味が多少ちがつて居て、すなはち和歌の部類の長歌や其他いろ〳〵の歌をば唱歌と充分にみとめず、唱歌といふのは唯朗詠する端唄やうの物をのみ主に言つたのが即ち昔の意味で、今日のはそれと違ひ、和歌でも、何でも、一切すべて口にうつたへる物を言ひます。

今日唱歌といふ言葉よりも一時は（明治十五六年以來一二年前まで）新体詩といふ名が主に流行しました。 これは大學の博士たちから言ひ初められた名稱で、隨分面白くないつけ方でした。 理窟から言へば如何にも字面のとほり新体の詩です。 しかし、其「詩」といふ言葉、それが大きな邪魔になります。 支那に「詩」すなはち「カラウタ」と言ふも

のが有つて、それはいづれも韻によつて作るもの、その思想が兎角ついてまはるため、新体詩といへばまた一種別の——以前一寸と世にあらはれた——和詩と今様と長歌と世界國盡しの体とのこれら四つの体を混ぜ合はせたものらしい考へが起ります。たゞ起るばかりで無く、その新体詩主唱者も時に韻法などを用ゐて、外國の眞似をした事も有りました。

これら、韻などを日本語の歌曲に盡力していゝか、どうかをば言ふより何より、第一、今唱歌の作り方に就いてもとむべき注意は在來の新体詩のわるい風をなるべく傳染らせぬことです。大學の博士たちがはじめて之を言ひ出し、之をばくり出したにも關はらず、ろのいはゆる新体詩といふものは唯の「達意」に止まり、その外に詩として取るべきところはすこしも有りませんでした。

いつぞやの國民の友に京都の池袋清風君が新体詩批評といふ論文を出しましたが、實に名論、その批難に遇つては在來の新体詩家もうなづかなれば爲りますまい。いかにも「詩」は「志」とさへ言ふ古代の解釋もあり、まず無論「達意」は主眼です。しかし「達意」だけで、たゞ一種類の節奏によるばかりで、その他言語の野卑、意匠の陋劣をかまはぬ物が上乘の歌曲と言へますか。思ひ切つて言へば大學の人たちが作られた新体詩の多數はすべてみな「達意」の外取るところは有りませんでした。今一々は評を爲ません。しかし、拔刀隊の歌にしろ、何にしろ、簡を尙ぶと言ふ歌曲の秘事を全く忘れた、しかも筆のゆくまゝに句を出してあるばかりです。そのくはしい事はこの唱歌つくり方初學の終りに於て言ひましやう。

一　日本の唱歌に韻は入用で無いこと。

歌曲に韻が必要か、どうかと言ふのは可なり爭論の種になつて居ます。が、この國語の体にもより、發音の風にもより、また語法の樣にもよる事ゆゑ、一概には言へません。唯、引きくるめて言ふだけのところでは、凡そ韻といふものは無用に近くて實益に遠いものです。

英國の詩聖みるとんはこの有名な詩の失樂苑のはじめに左のとほりの緒言を添へました、——

……Rime being no necessary Adjunct ortrue Ornament of poem or good Verse, in longer Works especially…………

これによればみるとんも韻を無用と考へたものゝ一人でし

た。それで失樂苑をも無韻でつくりあしたのでしやう。元來西洋の言葉は「えりめんたりい」で發音するのが多く、その點まつたく日本のと違つて居て、しかも「えりめんたりい」の言葉から組み立てられた歌曲れ實際韻が有つて大に益を得る事さへある、それでもみるとんは排斥しました。畢竟韻といふものは句脚の整頓するために置く區域といふより外の物では無く、その實用が主眼て、その用ゐ方の巧拙れ既に第二に位して居るのです。支那語はあながち「えりめんたりい」の種類のみ有りませんか、しかし同調（モノトナス）で進む語勢が多いからにはもつとも韻をば要します。それと西洋のと同じ格ではありません。

みるとんもいくらか言ひましたが、曲節を際立たせて明らかに見せるのは野蠻時代の美術心から起ることとです。よく言ふことですが、物の色は野蠻人にいたるほど強く感じるものを撰ぶもので、是は色にとゞまらず、そべて五感に觸れるもの、いづれも同じ理にしたがつて居ます。たとへば子供はしつこい紅を喜びますが大人は淡泊なのを好む類みなそれで、その極は平和の中に争乱の意を示したのをさへ愛するはどよなるものです。音樂に於てもまた左樣です。印度支那琉球などのを御覧なさい、この曲調は如何にも高低を強く立て、あります。わづかの音律の相違は野蠻人の耳には聞き取れず、聞き分けの付くのは大きな段落の間にある、そのゆゑに斯うあのです。和讃や讃美歌などの中におもしろく曲節の大きな變化に乏しいのも有ります。が、それに充分感情を注いてその歌と共に渾化するやうな人は――開明人の中にさへ――また最も少いものです。で、人間の聽神經にまだ今日のところ充分に發達せず、巧妙な音樂師でさへ些少の音律より外か聽き分けられぬほどのところ、すなはち此感で野蠻人と開明人との感觸の相違もわかるもので、すなはち感覺れ開明を追ふてます〱進み行くもの、開明の國の感覺の種類は野蠻の國のよりはるかに多いものと知れます。

すでにそれほど、それ故、開明の人にれ野蠻の人よりも多く感ずべき事は感じます。歌曲に於ても韻て特別な響きを作り、感動をつよく與へられずとも、韻律のわづかの高低でも句脚を聞きわける力は有つて、それ故野蠻人に一寸の感覺をあたへるものは一尺の感覺を思ひあされ、感に克たれて却つて厭ふ心を生じます。

韻の効用はつまり右のとほりで、すなはちその規則れ一般

の感覺に應用されるもので、また、それ故、一般の美術もこの規則の支配を受けます。

廣く言つただけでこのとほり、まして日本語は語法からして、語調からして韻を要めぬ種類です。その譯をすこし述べましやう。

前にも一寸言つたとほり韻は句脚をと丶のへる効用のあるもので、從つて句脚をと丶のへる必要によつて用ゐられ丶ばその効用をあらはすものです。支那語や西洋語は實に「えりめんたりい」に多く傾いた語調で、またその語調の中にも音調(アクセント)、即ち四聲がついて居ます。この音調、すなはち四聲はすこしでも變化させられ丶ば、それが耳に感じる力を失ふもので、この支配はとても脫することが出來ず、すなはち西洋でも「とろけいく」格や「あいあむびつく」格がおこり、また支那でも平仄配合の原式が出來たのです。既にこれほど、それゆゑ、これらの歌曲に於ては或は音調に逐はれあるひは平仄に逼られ、いきほひ言葉をもはなはだしく前後させなければならぬ必要も起ります。 Hushed are all meaner powers, ………これは All meaner powers are hushed と通常なら言ふところです。

しかし格は「あいあむびつく」、それゆゑに仕方なく順序を狂はせてあるのです。支那も同じ譯例は澤山あります。多少それゆゑ歌の意味をあらはす段に於て、韻の助けを得ることの有るのは當然の事です。

ところが、日本語は全くこれらと性質が違つて居ます。日本語には音調の束縛は非常に少なく、また言葉自身も「えりめんたりい」ではありません。

たとへば「やなぎ」と言ふ言葉、これはまことは「ぎ」に高い調があるのです。が、音律にくばつてこの「や」を高くし、また「な」を高くしてもいづれも差し支へはありません。およそ日本語は大抵これです。この便宜の及ばぬのは「針」、「梁」、「鶴」、「蔓」、などの同音異聲の言葉ばかりです。それゆゑこの點に於て音調格の、即ち四聲の束縛がありません。

次に日本語に「えりめんたりい」のが少ないこと、それは言ふまでも無く、句脚をと丶のへて仕舞ひます。「えりめんたりい」で無いために其句脚がと丶のふ、すなはち韻が入らぬ譯です。

その二つの原因によつて韻の効用の有無が定まるものです

しかし、日本語は前のとほりです。どうして、それ故、韻が入りましやう。や、韻を要する外國の歌曲よさへみるとんは韻を拒みました。まして性質のちがふ日本の歌曲、韻を用ゐるのは尤も無益な勞力です。

是からが唱歌の格で、次號にはか丶げます。韻の論はその大略だけで、前文だけで終りとします。

日光記行

佐々木信綱

今年は例よりも暑さの堪がたきよ催されて年比音にのみ聞渡りつる日光の瀧を見、東照宮にも詣でんと思ひ立ぬ。八月五日の日、かねて契りおける須長球ぬしと共よ門出し、午後五時上野の停車場より滊車にのる。飛鳥山を見出すよまだ青葉ある梢ども風にそよぎて蟬の聲々時ならぬ時雨に似たり。

花見しは昨日と思ふにあすか山蟬の聲こそ盛なりけれ。

戸田川にて

高瀬船むしろ帆あけぬ夕まぐれ吹まく風や追手なるらん。

川水ようつろふ入日のかけに紅の涙たゞよへり。

秋きても田面の稻は穗に出ぬを夕日の影はうすつきにけり

田のもに白鷺むれゐたり。風ふく。

夕日さすか丶しの笠を吹風にみの毛乱してさぎの立ゆく。

吹上の停車場よつきぬるは八時すぐる比也。月出たり。

吹風は昨日の夏よかはらねど月こそ秋とほのめかしけれ。

傍の茶店よいこひて車はと問ふよなしと答ふ。さらはすべなしとて畑道つたひゆく。

しの薄穗には出ねど道のべよ靡くを見れば秋めきよけり。

桑林の中を過て高き堤に至る。こは熊谷の果なし堤と云て荒川をもし水の越なん時ふせぐ爲よ川よりは三丁ばかりも隔ちて長くきづきたる也けり。道の程暑くわびしければ芝生よしばしいこふよ田面の蛙草村の虫とり〴〵にあはれあり。

月かげも蛙の聲も虫のねも苦しき時はをかしともなし。

ゆき〳〵て荒川に至る渡守早いねたれば、たゝきおこして川岸に舟子をまちつ丶

舟待つと荒川のへよわがをれは身よしむばかりさ夜風ぞ吹。

此比のひでりに水あせて舟よのる、やがて彼方の岸につきぬ。

月かけの宿る川べの水の上よいつしか浮ぶ秋の色かな。

螢の光うすれてとびかふを見て、

世中はかくこそ有けれ消殘る螢の光見る人もなし。

賤が住門田のおもをとぶ螢今は取るとてつどふ子もなし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小川にうつろふ月いと涼し。

　螢とぶかげは消たれて水の面にきらめく月の清もある哉。

十時比相上村須長氏につく。吹上より此迄は二里なれど夜あればにやいと遠かりし心地そ。早皆ふしたる程なれば明日こそ人々にあひぬべけれとて球ぬしとふしぬ。

六日つとめて球主の父宜方兄富夫主などに逢て何くれと物語あどし、さて須長氏をいで獨 冑 山村にゆく。行ての賤が屋に七夕祭の竹立てり。一昨日は舊暦の七月七日あれは也。

田舎には古きためしを捨やらで猶たあばたを祭なるらん。

小川の岸に月草あゐの花などさけり。

　朝風の涼しく渡る水の面に浮ぶも清し月草の花。

あはれとて心を染る人もあし咲つゞきたるからあゐの花。

冑山神社の前わたりして根岸氏につく。此家をふりはへ訪しは盾臣ぬしと共に行ゝんと契りおきつれば也。今日はうからやからつどはれたる時にて人々にあふ。奥まりたる所にあないせらる。庭の梢物ふりて池水いと清く蟬の聲しげし。

なく蟬の聲猶あつし、池水のみどりの色は涼しけれども。

つれ〳〵なれは武藏風土記あどよみて夕つ方家のわたりをそぞろありきそ。夜に入て月あかければ人々はし居そる程家あるじ武香ぬし川越より歸られけれはくさ〴〵の物語してふしぬ。

水鷄の聲 枕かみあり。

　水の面にうつろふ月を見よとてや水鷄鳴らん庭の池水。

七日天氣よし。盾臣主と須長氏をとふ。かねて今日と契りたれは待居たり。三人打つれつゝ荒川を渡る。

あきつとふ方を見やれは風渡る川そひうばら花咲にけり。

堤を下りてしばし川原をゆく程いと暑し。

　荒川の川原のさゞれやけたれは吹渡る風の猶暑くして。

吹上より汽車にのり大宮にて盾臣主に別る。かくて奥州行の汽車にのりゝはりぬ。蓮田久喜栗橋を過ぐれは利根川なり。坂東太郎と云名もしるく、廣さ千二百餘尺深さ三間餘もありといふ。此川は武藏下總の界にて徳川氏の時こゝに關をおかれたる所也。水上は上野の奥沼田より出づとぞ。

吹渡る風の行へに波見えて一そぢ白し利根の川つら。

しばし行て古河に至る。こゝは萬葉集に枕香のこがの渡と見たる所にて足利氏の末の比しば〳〵戰の有し所也。小山驛に小山判官朝政の城跡有と聞けど汽車なればいかゞはせん。北の方は廣き野あり奈須野の積あるべし。石橋を過る比空かきくもりて遠方の山雲懸れり。三時比宇津宮につきぬ。車にて行

に夕立ふり出て鳴神の音はげし。からうじて手塚屋に宿る。夕方空晴れたれば二荒山神社に詣づ。いと高き社なれば宇津宮の町々一目に見おろさる。九時比盾臣終列車にのりて來る。こは東京にえさらぬ事ありて大宮より別れしがおくれてきつる也けり。明日はつとめて出立たんと思へば早くふす。（未完）

しるれる作野邊おくりの歌の解

野邊おくりの歌はたくみな形容に富んだ歌です。原作は十句の歌ですが、なまじひに譯して興味を失ふよりはと考へ、解にしました。外國の歌曲を見せるのはこの法がもつとも宜さそうです。

や。　た。

一

消え入りさうな晝（夜）、死んだやうに靜な森の上に月がとゞまる。夜の幽靈は溜息して薄暗い空氣を噪がす。雲は雨となつて降る。絶え行く、墓所の燈明のやうに瞬いて、死人色の星は嘆きながら衰へる！幽冥のやうに無情――幻のやうで且無言、「死」の粧飾に暗くなつて、生靑い行列がその悲しい處を指してしづかに來る――かなしい處、墓がその下の夜をとざすところの。

二

杖にすがりながら、落ち込んだ暗い目でよろめき歩く人は誰。もまれた胸から絞り出されたやうにたゞ一の唸き聲が深い靜けさをやぶる！　鐵のやうに無情な「運命」につぶされて柩に生涯の最期の力を籠めたやう。で、聞け――「天父？」をつぶやくその冷な唇。雨はするどくその「恐怖」の里にしたゝッて、失望に肉の嚙み取られた骨をも透せば、怖ろしさに銀髮もさわぎ立つ。

三

火と熱する疵口、萎え果てた苦痛の心、肉に血は迸ばしる――でも聲の無くなッた唇には「天父」とひゞき、また子の無くなッた「天父」も「わが子」とつぶやく。氷のつめたさ――氷のつめたさ、その白衣でよこたはる――こゝろよい、黃金の、むかしの夢はみな消え失せて――「天父」といふ、快い、黃金の名が惡念の中にかくれ――そして、氷のつめたさ――氷のつめたさ――で、よこたはる。無くなッた。今までの樂しみといゝでんは何處。

紙屑籠

おもし樓蘊仙

浅島の國に下るとて人に別れけるに

まだきにも宿るか月の有明の名ごりをしまの海人の袖とて。

浅草の鼓くぞ人は成りぬべき、吾れを待乳の山と云ふとも。

宮古の浦にて雨晴れ月出でければ、

思ひかね曇るを頼む面影を月にみやこの浦は何なり。

此の年の春の始めつかた豊原某が札幌に赴任せる道の序に立よりしが、程なく彼地にて身まかりぬと聞きて、明くる年京なる友に消息をとて、彼の人の訪ひ來しは去年の今頃なりきなど書きて、

いとどしく氷も袖に解け添ひて「春や昔」の月ぞ流るる。

或る人（紀州人）久しく音づれざりしかば、

「跡見てぞ心名草の」友千鳥音無川に住ませぞもがな。

歸京日記の中に

（上略）みなれそなれし荒磯を離れなん名ごりさへが只ならぞ

いかにして遂にそむべき巴潟、汲みても見ばや月の心を。

（中略）悔しかりし事も恨めしかりし事もかかる時には隈なく思ひ出られて、契りつらき地ありけりと思ひ倣りて九月九日辭表を奉る、「人事九九に逢に堪へぞ、言ふことを休めよ今日は是重陽。」など思ひ出でらる。かくてぞ急がはしき藏人の除目も行はれぬべく、今しばし留まれと云ふ使節も頻まなりける。

韓錦紅葉の袖を待たんとて人の秋にや吾れは逢ふべき。

（中畧）などはかなき言葉に日を暮らして十月十日致仕の願ひを許さる。十二日には相知れる人人谷地頭と云ふ處にて送別の宴を開く、ここに立待の崎あり。

蝦夷錦着ても歸らぬ浪路には吾がため何をたち待の崎。

此の地は海山の眺め皆好きが中にも港の夜の景色こそいかに思ひ出でられんと兼ねてよりわりなけれ。誠や（玉鬘の巻に）兵部の君が船に乗る時「年經つる故郷とて殊に見捨て難き事も無し、唯松浦の宮の前の渚と彼の姉御許の別るるをなん顧みせられて悲しかりける。」とか。

又や見ん巴の浦の百船の星にあらそふ夜半の燈火。（下略）

内閣官報局新定送假名法（前號續）

十行	載セ。	載ス。	載スル。	載スレ。
	失セ。	失ス。	失スル。	失スレ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

タ行	捨(ス)テ○	捨(ス)ツ○	捨(ス)ツル○	捨(ス)ツレ○
	出(イ)テ○	出(イ)ツ○	出(イ)ツル○	出(イ)ツレ○
ナ行	寝(イ)ネ○	寝(イ)ヌ○	寝(イ)ヌル○	寝(イ)ヌレ○
	尋(タヅ)ネ○	尋(タヅ)ヌ○	尋(タヅ)ヌル○	尋(タヅ)ヌレ○
ハ行	經(ヘ)	經(フ)	經(フ)ル○	經(フ)レ○
	教(ヲシ)ヘ○	教(ヲシ)フ○	教(ヲシ)フル○	教(ヲシ)フレ○
マ行	譽(ホ)メ○	譽(ホ)ム○	譽(ホ)ムル○	譽(ホ)ムレ○
	改(アラタ)メ○	改(アラタ)ム○	改(アラタ)ムル○	改(アラタ)ムレ○
ヤ行	消(キ)エ○	消(キ)ユ○	消(キ)ユル○	消(キ)ユレ○
	覺(オボ)エ○	覺(オボ)ユ○	覺(オボ)ユル○	覺(オボ)ユレ○
ラ行	枯(カ)レ○	枯(カ)ル○	枯(カ)ルヽ○	枯(カ)ルレ○
	顯(アラハ)レ○	顯(アラハ)ル○	顯(アラハ)ルヽ○	顯(アラハ)ルレ○
ワ行	植(ウ)ヱ○	植(ウ)ウ○	植(ウ)ウル○	植(ウ)ウレ○
	飢(ウ)ヱ○	飢(ウ)ウ○	飢(ウ)ウル○	飢(ウ)ウレ○

右下二段活用ノ動詞ハ其數實ニ多シト雖モ其「ヤ」行及「ワ」行ニ屬スル詞ハ甚ダ少シ即チ「ヤ」行ニ於テハ右ニ出セル覺ユ、消ユ、ノ外ニハ

聞(キコ)ユ　見(ミ)ユ　癒(イ)ユ　協(カナ)ユ　寒(ヒ)ユ　越(コ)ユ　肥(コ)ユ
榮(サカ)ユ　潰(ツヒ)ユ　費(ツヒ)ユ　生(ハ)ユ　冷(ヒ)ユ　吠(ホ)ユ　見(ミ)ユ
燃(モ)ユ　萌(モ)ユ　痿(イ)ユ　冴(サ)ユ

等ノ詞アルノミ又「ワ」行ニ於テハ右ニ出セル植ウ、飢ウノ外ニハ唯

据(ス)ウ○　蹴(ケ)ウ○　聶(ヒ)ユ○

ノ三語アルノミ且ツ其内聶(ヒ)ウト云フ詞ハ實際用フルコト罕ニシテ又其蹴(ケ)ウノ如キモ今日ニテハ

蹴(ケ)　蹴(ケ)ル○　蹴(ケ)レ○

ト一段活用ノ如クニ用ヒラルヽニ至レリ

（五）一段活用　一段活用ノ動詞ハ第二段横行即チ「イ」ノ横行ニノミ活クモノニシテ縱行ハ「カ」「ナ」「ハ」「マ」「ヤ」「ワ」ノ六行ニ亘ルモノナリ其例左ノ如シ

	將然言、使令言、連動言	終止言、連名言	既然言
カ行	着(キ)	着(キ)ル○	着(キ)レ○
ナ行	煮(ニ)	煮(ニ)ル○	煮(ニ)レ○
	似(ニ)	似(ニ)ル○	似(ニ)レ○
ハ行	干(ヒ)	干(ヒ)ル○	干(ヒ)レ○
	嚏(ヒ)	嚏(ヒ)ル○	嚏(ヒ)レ○
	簸(ヒ)	簸(ヒ)ル○	簸(ヒ)レ○
	見(ミ)	見(ミ)ル○	見(ミ)レ○

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

マ行	顧(カヘリミ)	顧(カヘリミ)ル○	顧(カヘリミ)レ○
	試(コヽロミ)	試(コヽロミ)ル○	試(コヽロミ)レ○
	惟(オモンミ)	惟(オモンミ)ル○	惟(オモンミ)レ○
	鑑(カンガミ)	鑑(カンガミ)ル○	鑑(カンガミ)レ○
ヤ行	射(イ)	射(イ)ル○	射(イ)レ○
	鑄(イ)	鑄(イ)ル○	鑄(イ)レ○
ワ行	居(ヰ)	居(ヰ)ル○	居(ヰ)レ○
	綬(ヰ)	綬(ヰ)ル○	綬(ヰ)レ○

此一段活用ニ屬スル動詞ハ其數甚タ少クシテ右ニ擧ケタル所ヲ以テ畧々之ヲ盡セリ又用ト率トノ兩詞ハ古人ノ用法ニ據レハ正ニ此一段活用ノ「ワ」行ニ屬スルモノニテ

用(モチヰ)	用(モチヰ)ル○	用(モチヰ)レ○
率(ヒキヰ)	率(ヒキヰ)ル○	率(ヒキヰ)レ○

ト活カシムヘキナレトモ今慣用ニ從ヒ下二段活用トス即チ左ノ如シ

用(モチ)ヒ○	用(モチ)フ○	用(モチ)フル○	用(モチ)フレ○
率(ヒキ)ヒ○	率(ヒキ)フ○	率(ヒキ)フル○	率(ヒキ)フレ○

以上列擧シ來リタル所ヲ以テ動詞語尾ノ變化即チ活用ノ樣ハ畧々開示シ得タリ而シテ其送假名ノ附法ハ總テ動詞語尾ノ變化スル所ヨリ寫スコト右諸活用ノ證例ヲ以テ示シタルカ如シ若シ動詞ノ送假名ニシテ正ニ其語尾ノ變化スル所ヨリシテ之ヲ寫サハ其法最モ見易キノミナラス又能ク其動詞ノ本義ヲ誤ルコトナカルヘシ依テ左ニ少シク例ヲ擧ケテ以テ動詞送假名法ノ忽ニスヘカラサルコトヲ知ラシム

○替ノ字ハ四段活用ニモ下二段活用ニモナルモノニシテ四段活用ノ時ハ自ラ活ク詞(卽チ自動詞)トナリ下二段ニテハ他ニ活掛クル詞(卽チ他動詞)トナルナリ故ニ若シ玆ニ入替ノ二字アリ其送假名ヲ附スルニ方リ單ニ入替テト書カハ入替(イレカヘ)テトモ又入替(イリカハリ)テトモ讀ル丶モノナリ然ルニ入替リテトリテノ送假名ヲ附スルトキハ一目シテ自動詞ナルコトヲ知リ入替ヘテトヘテヲ寫ストキハ卽チ他動詞ナルコトヲ知リ得ヘシ是ヲ以テ送假名ノ完否ニ由リテ語意ニ明不明ノ差ヲ生スルコトヲ知ルヘシ下ニ擧クル諸語ヲ活カシテ以テ送假名法ノ必要ヲ知レ

自動詞　他動詞　自動詞　他動詞

向キテ	向ケテ	退キテ	退ケテ
積キテ	積ケテ	入リテ	入レテ
添ヒテ	添ヘテ	從ヒテ	從ヘテ
立チテ	立テヽ	苦ミテ	苦メテ
染ミテ	染メテ	進ミテ	進メテ
止リテ	止メテ	預リテ	預ケテ
掛リテ	掛ケテ	寄リテ	寄セテ
隔リテ	隔テヽ	當リテ	當テヽ
重リテ	重テテ	連リテ	連テテ

以上ノ諸語ニ於テハ四段活用ハ自ラ活ク詞ニシテ下二段活用ハ他ニ活掛クル詞ナリ

開ケテ	開キテ	拔ケテ	拔キテ
挫ケテ	挫キテ	解ケテ	解キテ
燒ケテ	燒キテ	消エテ	消シテ
覺メテ	覺シテ	破レテ	破リテ
切レテ	切リテ	割レテ	割リテ
折レテ	折リテ	離レテ	離シテ

以上ノ諸語ニ於テハ下二段活用ハ自ラ活ク詞ニシテ四段活用ハ他ニ活掛クル詞ナリ

(第二)延長動詞　延長動詞トハ語勢ヲシテ圓和ナラシメンタメニ動詞本然ノ語尾ヲ延セルモノヲ謂フ其送假名法ハ總テ本然語尾ノ變化スル所ヨリ之ヲ寫ス其例左ノ如シ

本語	延ヒタル語	本語	延ヒタル語
申ス	申サク	願フ	願ハク
冀フ	冀ハク	思フ	思ハク
疑フ	疑フラク	言ハン	言ハマク
言フ	言ヘラク	恐ル	恐ラク
見ン	見マク	聞ク	聞クナラク
聞カム	聞カマク	恨ム	恨ムラク
語ル	語ラク		

(第三)短縮動詞　短縮動詞トハ連合語尾ノ約リタルモノヲ謂フ其種類凡ソ九種アリ其送假名法ハ總テ語尾ノ約リタル所ヨリ寫スモノナリ其例左ノ如シ

(一)「ク」「シク」及「ケク」ノ副詞語尾ト「有ラン」ト云フ詞ト連合シテカラン　シカラン　ケカラント約レルモノ

安ク有ラン　安カラン

面白ク有ラン。。　面白カラン。。
嬉シク有ラン。。　嬉シカラン。。
樂シク有ラン。。　樂シカラン。。
安ケク有ラン。。　安ケカラン。。
露ケク有ラン。。　露ケカラン。。

（二）詞副語尾ノ「ニ」ト「有ラン」ト連合シテ「ナラン」トナレルモノ

平ニ有ラン。。　平ナラン。。
靜ニ有ラン。。　靜ナラン。。
當然ニ有ラン。。　當然ナラン。。

（三）「テ」及「ト」ナル助動詞ト「有ラン」ト合シテ「タラン」トナレルモノ

落チテ有ラン。。　落チタラン。。
逢ヒテ有ラン。。　逢ヒタラン。。
渺茫ト有ラン。。　渺茫タラン。。

（四）「キ」ト「有リ」ト合シテ「ケリ」トナレルモノ

飽ケリ。。　行ケリ。。　置ケリ。。　畫ケリ。。

（五）「シ」ト「有リ」ト合シテ「セリ」トナレルモノ

押セリ。。　寫セリ。。　増セリ。。　充セリ。。

（六）「チ」ト「有リ」ト合シテ「テリ」トナレルモノ

待テリ。。　立テリ。。　勝テリ。。　持テリ。。

（七）「ヒ」ト「有リ」ト合シテ「ヘリ」トナレルモノ

伴ヘリ。。　駢ヘリ。。　逢ヘリ。。　舞ヘリ。。

（八）「ミ」ト「有リ」ト合シテ「メリ」トナレルモノ

沈メリ。。　含メリ。。　住メリ。。　積メリ。。

（九）「リ」ト「有リ」ト合シテ「レリ」トナレルモノ

織レリ。。　居レリ。。　釣レリ。。　張レリ。。

（第四）合成動詞　合成動詞トハ動詞ト動詞ト相合シテ成レル者ヲ謂フ此等ノ動詞ハ總テ下ニ連リタル詞ノ語尾ノ變化スル所ヨリ之ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

差遣サン。。　差遣シ。。　差遣ス。。　差遣セ。。
行過キン。。　行過ク。。　行過クル。。　行過クレ。。
屆出テン。。　屆出ツ。。　屆出ツル。。　屆出ツレ。。
逢見ン。　逢見ル。　逢見レ。

以上四種動詞ノ終止言ヲ受ケテ隨分廣ク用ヒラル、「ヘシ」ト云フ詞ハ往々　可シ　可キ　可ク　可ケレ　ト「ベ」ノ音ヲ異字ニテ寫スト雖モ茲ニハ總テ假名ニテ

ヘシ　ヘキ　ヘク　ヘケレ

ト寫スヘシ

○副　詞

凡ソ副詞ニ五種アリ（第一）本然副詞（第二）轉成副詞（第三）合成副詞（第四）熟語副詞（第五）疊字副詞是ナリ

右五種ノ副詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第十三則　本然副詞ハ今、唯、只、惟、啻、皆、相、復ノ入詞ヲ除クノ外ハ總テ其語尾ノ一音ヲ寫シテ送假名トス

第十四則　轉成副詞ハ其語尾ノ「ニ」、「ク」、「シク」、「ケク」、「テ」又ハ「ト」ヲ寫シテ送假名トス

第十五則　合成副詞ハ合成セル品詞ノ本來所屬ノ法ニ從ヒ送假名ヲ附ス

第十六則　熟語副詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第十七則　疊字副詞ハ疊音ノモノハ々符ヲ附シ疊訓ノモノハ〻符ヲ附ス

（釋例）

（第一）本然副詞　本然副詞ハ專ラ副詞トシテ用ヒラルヽ者ニシテ其語尾常ニ定リテ變化セス故ニ理ニ於テハ當ニ羆用スヘキモノナレモ今慣用ト讀續ノ便宜トニ依リ

今　唯　只　惟　啻　皆　相　復

ノ入詞ヲ除キテハ總テ其語尾一音ヲ寫シテ送假名トス

其例左ノ如シ

當テ　曾テ　將ニ　方ニ　當ニ　應ニ

旣ニ　已ニ　業ニ　終ニ　遂ニ　爲ニ

故ニ　盍ゾ　曷ゾ　何ゾ　焉ゾ　安ゾ

凡ソ　殆ト　幾ト　況ヤ　否ヤ　頗ル

乍チ　忽チ　未ダ　尙ホ　猶ホ　仍ホ

槪子　率子　蓋シ　恰モ　宛モ　尤モ

最モ　豫メ　專ラ　獨リ　甚ダ　太ダ

剩ヘ　聊カ　先ヅ　聽テ　借テ　自ラ

躬ラ　自ラ　親ラ　豈ニ　寧ロ　必ス

爭テ　爭カ　乃チ　則チ　夫レ　是レ

故レ

（第二）轉成副詞　轉成副詞トハ他品種ノ詞ヨリ轉成セルモノニシテ分チテ五種トス即チ（一）語尾ニ「ニ」ヲ履ムモノ（二）「ク」、「シク」、「ケク」ヲ履ムモノ（三）「テ」ヲ履ムモノ（四）「ト」ヲ履ムモノ（五）本語ヲ其儘副詞トシテ用フルモノ是ナリ共ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(一)「ニ」ヲ履ム副詞「ニ」ヲ履ム副詞ハ時又ハ所ヲ示ス名詞及代名詞「ナル」若クハ「ノ」ヲ帯ブル形容詞、及數形容詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ

日ニ○　月ニ○　年ニ○　朝ニ○　夕ニ○　時ニ○
始ニ○　終ニ○　右ニ○　左ニ○　東ニ○　西ニ○
内ニ○　外ニ○　上ニ○　下ニ○　前ニ○　後ニ○
横ニ○　縱ニ○　傍ニ○　中ニ○
茲ニ○　何處ニ○　彼處ニ○　其處ニ○　如何ニ○
巧ニ○　斜ニ○　遙ニ○　靜ニ○　明ニ○　平ニ○
速ニ○　愚ニ○　懇ニ○　朗ニ○　暖ニ○　緩ニ○
誠ニ○　眞ニ○　健ニ○　盛ニ○　詳ニ○　具ニ○
細ニ○　新ニ○　鮮ニ○　專ニ○　僅ニ○　纔ニ○
互ニ○　迭ニ○　竊ニ○　仄ニ○　穩ニ○　恣ニ○
嚴ニ○　大ニ○　罕ニ○　稀ニ○　俄ニ○　猝ニ○
遽ニ○　憖ニ○　特ニ○　殊ニ○　更ニ○　共ニ○
倶ニ○　漫ニ○　濫ニ○　妄ニ○　頻ニ○　荐ニ○
忽ニ○　仮ニ○　常ニ○　重ニ○
美麗ニ○　寛大ニ○　苛酷ニ○　丁寧ニ○　輕卒ニ○
大ニ○　二ニ○　第三ニ○

(二)「ク」、「シク」、「ケク」ヲ履ム副詞「ク」、「シク」、「ケク」ヲ履ム副詞ハ「キ」、「シク」若クハ「ケキ」ヲ履メル形容詞ヨリ轉成セルモノナリ其例左ノ如シ

善ク○　惡ク○　早ク○　遲ク○
遠ク○　近ク○　長ク○　短ク○
細ク○　太ク○　薄ク○　厚ク○
高ク○　低ク○　白ク○　黑ク○
明ク○　暗ク○　重ク○　輕ク○
嬉シク○　悲シク○　樂シク○　苦シク○
厭シク○　貴シク○　寂シク○　囂シク○
親シク○　怪シク○　空シク○　宜シク○
正シク○　烈シク○　美シク○　涼シク○
明ケク○　爽ケク○　遙ケク○　安ケク○
靜ケク○　平ケク○　露ケク○　寒ケク○

「日よりも月

「日よりも月の方が有難いね」。「なぜ」。「斯うだらう月の方が日より一倍たツさんでもいゝよ」。「どうして」。だつて、夜眞暗になツたところで月は出て、人間に光りを貸してくれるだらう。だから有難い。日なんぞハ左樣で無い。明るい晝間出て來て光りも何も貸してくれず、たゞ遊んで居るのだもの」。

批評

紅葉山人のやまと昭君細評　美妙齋主人

紅葉子の作の出版よなつたのを美妙齋ごの評するのは是がれじめて、色懺悔や風雅娘をば早くも世間の手ばしこい批評家よ先鞭つけられ、遲まきに出る譯にも行かず、其儘にしてしまひましたが、今度こそ待ちかまへた大和昭君、時をいそぐあまりよは吐嗟あがら筆をつけました。

「平生を知つてから批評しろ」とか、紅葉家の平生をば私はよく知つて居ます。で、或は世間の批評家よりまた違つた着目もありましやうか。紅葉子の二三年前の嗜好をたづね、昨一昨年の好尚を逐ひ、そして今日の作よ就て之を見ればやはり一筋かはらぬ脈は有ります。その脈とは何か、文よ苦勞が見えて趣向よそれが見えぬこと、辭藻よ琢磨の痕は有つて人物に鍛煉が乏しいこと、これでそ。

まづ大和昭君を讀んで不思議に思はれるのはそれが實を寫すのを主眼としたのか、または美を寫すのを目的としたのか分らぬ事です。實を主としたのでも無い、また美を主としたのでも無い、あらば兩方を折衷したのかと言ふよ、また左様でもあく、つまるところは混淆したのでそ。一葉といふ少女の性質はどんなものです。その顏は完美、その人がらも完美（暗に）、そしてその氣立は？、何かわれ〳〵の前人種彦邊の猫寫法の面影をばとゞめて居ますが、さて此處で見れば（阿杜といひ、末といひ）全く美を寫した筆です。暗で、應答よ就て之を見れば、またかはつた處が有ります。よ時代も知れて居る、それで「ふうむ……てな」第十六頁と實を主とした處があつて、そしてその直前には「御ざります」と美を主としてあります。元來紅葉子よは美を寫そのを主とされる方です。以前いろ〳〵朋友同士間よ稽古の物を書き合つた時、いづれもその方の主義でした。色懺悔よしろ、これよしろ、またこれらの主義よ支配される、それで充分に規律の立たれぬのは筆よ迷ひが有るのと見えて見ぐるしいです。と言つて一方にかたよれと言ふのでは有りません。美を寫すのも無論よろしいです。しかし、今日の世界の文學は美を主としまそか、乃至實をそ。實を美とせずに、美を美としますか。あるはどうらにはあのとはりの反對者が有ります。しかしすてつとが今日突然あらはれたならそのすてつとを十全の哲學者と言へますか。西鶴を御好みあさる

のは何より結構、自稱小説家が多くてぢつけんすの名は知つても西鶴の名を知らぬ、その目先に注意を與へられるのは贊成の外ありません。　が、かぶれられるのは主眼では有りますまい。　御考へでも有りましやう、西鶴の理想は何です。天保小説の理想は淵源を何處に發して居ますか。　西鶴を愛するあまりその理想まで眞似、その口氣の欠點をも眞似られるとは近頃ひそかに惜みます。　今根岸の篁村氏、この人の筆も八文字屋から來ました。　が、その學びたての當座、すなはち今から四五年前と今日とを比較して御覽なさい、どれご消化して居ますか。　世間一般の讀者は多く輕口を受けるもの、篁則君の輕口は流暢との尊號に變はつて世間からほめられます。　が、その點に於て私は世間と感を同じくはしません。　されば迚て篁村君の作に敬服はして居ます。　何の點から敬服するかと言ふに、八文字屋から生れて八文字屋の臭味を脱し、しかもます〳〵理想が進んで一段です。
勿論學びたては誰しもしつこい物、眉山子や春のや君や、かく申す私までが、或は也有にかぶれ、或は源氏にかぶれ、折々馬鹿々々しい心酔の人となつた、それは誰しも同じこと、しかし、かぶれの長いのは鉄もくされて錆とあるもの、色懺悔にとゞまらず、風雅娘に限らず、今後までもます〳〵食ひ込まれては或は後來望ある進歩の上に御障は有りますまいか。
やまと昭君に於て著者の理想は無情に幼稚です。　如何ある冐頭戀慕を説かれたところは敬服、それが理想で全篇がそのために支配されてゐるかと質せば、見落としか、私の目には何のそれらしい物も注まりません。　戀慕が凝つて疾忌となる、それは勿論です。　が、それを受けるのに癇性の平馬を出されたのはふれでりつく　はりずんが言つた著者が骨を偷んだ事でそ。　もしこの平馬が左ほどの癇性でも無く、たゞ一念戀慕に強く驅られて、終に大事を起したとの事に作つたら、運筆は六づかしいですが、著者の勇氣はさて凄まじく見えましたらう。　それを体よく癇性と金箔を置く紙に雌黄を塗られたのは余處ながら殘念です。　曾て紅葉子が作られた京人形、その配置や結構に於ては論もありますが、痴愚を擇んで及ばぬながらもと出かけた、その時實は私も大に敬服して居ました。　が、その以後は色懺悔から何か曖昧なものばかり、ふるふ勇氣の無くなられたやうに見えるといふのは僻目ですか。　奇警な句は俗受を買ふ第一の物、奇警な句に富んで肝心の人物、性情を第二流に置かれるのは此頃の硯友

黨の流行、それを我おもしろの世の御爲めでかしはアイロニーなしろ何。なしろ褒めてさわぐーその方へ傾かれる形迹は果して有りませんか。　無いと仰やるならそれまで。多少有ると思召すならすこし御注意を願ひます。　蓬村君のこの頃の文筆の變化して行く体、御參考になりましやう。

　紅葉子が「あれェびあんないと」のなかから拔いて一つの小説をかゝうと望まれて居たのは既に一昨年からの事、終に企望は實となッてこの大和昭君となりました。が、原書の趣向、あれほど奇に過ぎたもの、すなはちそれを繕はうためにに雪之助と阿桂とを出されたのは御苦心でしたらう。　が、食客の美人は無殘にも其家の御娘さまの光を奪ひました。第三回阿桂と雪之助との一段は中々の上出來、つひそれがためには全篇の大脚色の方が一部の小脚色に蹴押されて仕舞ひました。　勿論こゝは六づかしいところです、一方では結末の趣向を產み出す土產となり、一方ではそのまゝ力を弱くして仕舞はなければ爲らぬところーーさァ其處、結末を產み出すために作者は骨を折られて、力を弱くする事に作者は心を向けませんでした。　話しは違ひますが繪でも同樣主となるものを粧ふ下章は粧ひながら力を輕くするのが方、紅葉子はそれと氣に注められませんでした。

　第十八頁、善助が親鸚鵡の事を物語る中、みな〱誰が主人へ云附口をしたかと訝ッて話すところ、こゝは眞面目くさい花瓶をこはしたと、か硯箱を損じたとか言ふ事よりも猶しら〱しい、輕い冗談にした方が巧妙の腕といふもの、大分この手をわれ〱の前人はつかッたでは有りませんか。たとへば、はじめに一葉が袖の千切れぬため紫の組で袖口をとめたといふやうな刺笑の形容、それがこの場に取つての繪具です。元より和蘭陀は二萬三千里といふほどな善助のはなし、すこし虛がまじッても大事ありますまい。

　次にその子細は鳥の告口だと仲働が直に言ふのは紅葉子にも似合はぬ事、こゝのところでは人口すべて妾をそれかと疑ふのが人情、一旦さう出してまた誰かの分解で、はじめて鳥の告口とした方が恐らくおだやかでしやう。

　善助の物語りは全篇の趣向と同じやうな事、同じやうな事で同じやうな結果に對するのはむしろ不手際です。　こゝはすこし外の趣向を交ぜ、その昔しばなしは鸚鵡のために主人が幸福を得た体にしたらば、平馬がそこで鳥を買ふのも人情に近く　無理なところは有りますまい。　善助のはなしのま

まで平馬が馬を買ッたのは大きに無理です。以上は大きなところ、是からはこまかいところ。それには千金のところが中々あります。

第三頁、戀慕の一文章は中々の好文字。その第四頁、やき持をた、一口にいひ消す奴は死で見よ！犬に喰はれてしまふ」の「死で見よ」は絶妙の句、紅葉子が恐らく自慢の文字でしやう。が、折角の物を、「犬に」云々は情無い至り、冗といふが無理ですか。同頁、「無孔笛」は古事をつかッて大居妙、しかしなぜ「ムクテキ」と仮名を御付けなさらなかッたのです。

第五頁、「大振袖の八口を紫の組にて留めたる異様の物數奇中暑日に何度といふ數をしらず人に引かる、袖のちぎれぬためとてかく。また或時はいきぬけ底なしの袂をつけし衣をきたりしは附文のこれに溜らぬやうにとは…うそらしけれどもこの藩士の物語。」前後の形容いづれも絶妙、さすがは紅葉子です。が、振袖の方の文は言ふまでもなく作者の言草で、底なし袂の方は藩士の物語でしやう——文章の配り方及び「この藩士の」の「この」から考へれば。ならば何故作者は人をわらはせやうと勉められました。前の振袖云々の評判も藩士の口から出たとすれば此上もなくよろしいです作者の口から出たとすれば、こゝにも人をくすぐッて噪ぐ時は流作者の面影があります。辯護は爲たくも仕方ありませんこの處では折角の形容ながら徒勞となりました。

五頁から六頁へ掛けて、一葉の教育を述べるところは八橋撿校！龍本流！どうも陳腐な。

六頁、掻捨の反古を元結にする云々は上出來。その第三行、「五分の戀」の「五分」は紅葉子の癖、音調を飾んだところから來た失策、何の益にも立たぬ句です。その第四行「預り物の一命」は上々の出來。第六行、眉目に性質を對させたのは姫君に馬士と言ッたやうな塩梅、御手がぬかりました。その第八行「御光が見えさうなも」のはまた〳〵上出來、敬服。その第十一行「うつり香かぐ男」とは否味たつぷり、不敬服。

第八頁第二行「わが娘には死を急げ」、上々とも上々とも言ひやうのない句、やまと昭君中壓卷の句、幽齋あらば制の詞に入れましやう。こればかりは誰でも目をつけるが宜しいこと。實に感心しました。その第十二行「夢かや…」は生ぬるくて而も古いこと、さア何にたとへましやう。

第九頁末行「無藝の親父」はかなりな句です。

第十頁第九行「黒塀がゝれあり」。是も上々の出來。

さてその次の行の「下紐」、この言葉は元來いやな言葉、前代の作者ならばいざ知らず、紅葉子がこれをわづかの小說に二度まで(第三十一頁第三行にもある)用ゐれらるとは平生の御氣象から、隨分野暮で無い方には似合はぬ不仕末です。

第十二頁第三行「鰥も鹿にはたつまい」、これも作者の苦心は十分見える形容、上出來です。

第十三頁「茶烟草盆を運ぶ阿桂のやがて出て行くより」、これは新奇な、面白い句法でそ。

第十五頁、「御覽ぜよ」は御苦心の句法、しかしよいとは私には思はれません。子細は言ひません。よく考へて御覽ぜ――いや、冗談は失禮――御覽なさい。

第十七頁「忍びあふのよし」の「の」と「ふるれバ」は洵に雅俗折衷でしやう。が、このやうな折衷は御止めになつた方が……

第廿頁、「御座るてや」は春のや君が「旅ごろも」に「はべるぞ」とつかいれたのと同樣、歯が浮きさうな冗談です。

さて第三回、こゝは洵に上出來、はとんど隙は有りません。

ヤ、廿二頁の「痛くない」と第五頁の末から二行目、「若とのなれば」の「なれば」は見易いほどの無駄、第廿五頁第九行「一足さがッて」とは過大の形容。第三十頁、「もう四五日留守……」と「四五十年……」とは前のを阿桂に言はせ後のを秀齋之助に言はせた方がいゝこと、これらが疵です。中の秀句とたづぬれば「御落胤」と第二十九頁のはじめ四五行くらゐ、しかし全体から言へば壓卷の回です。「かゝる姿を察れさせやうと……」は前人の詩に同じ意味の句がよくありますが、しかしなめらかで中々おもしろいです。

第三十一頁、「露さへわれにぬれる」とは些語格がちごのッて居ます。「下紐のかたくななる」とは何もまづく、意も陋劣です。

第三十三頁、「山には……木根岩角は無かりしか」はこれまた作者苦心の句と見えました。上々の出來です。しかしその後の御說法は場處がらに不相應です。それ「人を見て」とか……

第三十六頁は輕い筆、しかし「やア」は「おや」に變へた方が宜さゝうです。いかゞ。

まづ大体が右のとほり、文の細かい方に得て趣向の經營に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

い全く得て居ません。　紅葉子、御不承知なら御返事を願ひます。　妄評多罪。

女子の務

ぶふねる女史の作を中川重麗氏が譯されたものです。　その評は既に諸新聞に出て一同賛成を表して褒めました。　われ〳〵も之に對する異論も無いこと、どうして更に蛇足の評を加へられましやう。　充分に今日第一等、婦人に有益な書物です。　いらつめが一先御讀になるべきものです。　定價八十錢、發行所は神田淡路町の尙友社。

右の外婦人に有益な新板書物は、三島通良氏の

はゝのつとめ（七十五錢 丸善發兌）

赤十字社足立寛氏　看護婦教程　（馬喰町島村發兌）

はゝのつとめは姙娠中の心得、子そだての心得、看護婦教程は看病法を記した物です。　いづれも實用の家政書物です。

國民の友のおもかげ細評續稿

これは餘白のないため省きました。

辞書に無い解釋

舌——よくも走るが、つまづきもする、すなはち暴馬。

齒醫者——人の齒を引拔いて自分の齒を動かす種にする人。

商買——双方相手を欺き得たと心得て居る体裁のよい事。

著述家——骨を折つて名譽と誹りとを買ふ人。

懸賞文藝

第三回懸賞文藝應募得點者

題　ほたるがり

●俳句の分

手をのべて舟かたむけしほたるがり。……大西鼯尾（フクヲカ）

行きあたる闇のかきねやほたるがり。……琴水女史（オホサカ）

手に闇をおいてにげたるほたるかな。……堀江靜子（マツン）

右いらつめ一部進呈の分

川ぎしによみのこぼるゝほたるかな。……堀江靜子（マツン）

右第二等賞いらつめ半ヶ年分進呈の分

●和歌の分

ふく風にたまとみだれてとぶほたる
そでにつゝみて家づとにせむ。……永島芳子（ツキヂ）

かは風にひるのあつさもなつむしの
　ひかりに又も身をこがしつゝ。……みさご(トウケイ)
今も猶たゝかふ字治の川ほたる
　てるはかゞりか、聲たてずして。……梶田成美(シヅヲカ)
うなゐ子の聲するかたは影もなく
　やま澤みづゑとぶほたるかな。……彦坂長之助(トウケイ)
　　右いらつめ一部進呈の分
あつ山のこのしたかげはくらけれど
　ほたるはおのが夜をまつらむ。……春流(トウケイ)
　　右第二等賞いらつめ半年分進呈の分
枝ながらとらむとすれば露さへも
　玉とちりつゝとぶほたるかな。……美見仲子(ナカヤマ)
　　右第一等賞

附けて不思議な事が有ります。前の彦坂氏の歌によく似た歌を美妙齋が去年詠んでありました。もつとも美妙齋のもまだ世には出さなかッたものそれゆゑ暗合です。
すなはち、美妙齋のは
　檜扇のかぜ吹くかたに陰をおきて
　　蘆の葉うらをゆくほたるかな。

●今様の分

かはかぜきよきすみだがは、
　なみのまにまにこぎゆけば、
さほのしづくはほたるにて
　すゞしくつきもうかぶなり。……山村文子(ナゴヤ)
くものはしかほたるびか、
　あしやのさとのゆふまぐれ、
かげをしたひてわけゆけば
　のべのつゆこそみだれけれ。……中村貞子(ナゴヤ)
　　右いらつめ一部進呈の分

●文章の分

螢狩――心合の孃と風わたる野澤の夕べの螢狩。其ゆかしさ、まこと趣ハ云へません。涼しい光は、ぬきもとめぬ玉とみだれて、こゝ、かしこ、其數多いにつれられて、雄々しくも離れ離れに歩みの方向を背けるまで。岸邊に寄り來る漣の宿した露とも知らず、葉末に双の手を掬ぶも、をかしい限り。あゝ、此處の靜けさと清さとは、櫻月、花の雪ちる明ぼのに、「又や見んかたのみの櫻がり」とものせられた、其昔の風情に比べても、恐らく勝ることはあつても、劣ることはありますまい。……三坂きぬ(オホサカ)

くる〻まは露と乱れて夏草のしげみにしげく飛螢かな。其飛螢からんとてたまあふ夜どちうちつれて、とある野邊にゞ出よける。時しも五月それの日の月はあれども此頃の空のくせとて薄曇り、晴もえやらぬ朧夜よしくものとてはなよかある千草のしとね心地よく、葉末の露よのどしめし乱れ飛かふ螢火は天の川原にてる星か、筑紫の海の不知火か高くまへるはさながらに月の桂のちるごとく低くとべるは白玉のつらぬきとめし糸切れて花びむしろを行くごとく、飛行千點去つてまた來ると云し時もか〻る時をや詠じけん。招けばにげつ追へばきつあふぐ扇ようちならそ團扇の風よけしとんでこ〻にも一つ二つ三つ、いつかれ持てるうそばかりの籠よみつれば燈の光りのごとくか〻やきてちりの數さへ見えわかん。いざやまかりてもろこしの車胤のためし〻て見んと名殘れをしや濱千鳥友よびかれしや〻西ふかたふく月と螢火を路の栞に己がじ〻家路よてそはかへりけれ。……鈴木秀(カカ ヘナ)

右二等賞いらつめ半年分進呈の分

追加　唱歌

ひるまの　あつさも　わする〻　ばかり、
　ふきくる　かぜさへ　すゞしき　ゆふべ。
わかば　しげれる　こかげを　たどれば、
　みえつ　かくれつ　とびかふ　ほたるの
一二三四　あな　おもしろや、
　五六七八　ああ　おもしろや。……小宅雪子(ケト イロ)

右いらつめ一部進呈の分

第五回題の「うつり香」の得點者は次號。

第六回懸賞文藝新題

紅葉少女

右の題で述べるべき趣意は紅葉の下に少女が居る、それに就て何か物語なり評ありを加はへるのです。たとへば戸がくし山紅葉狩の故事の物語などのやうで宜しいので、つまり紅葉の下の少女よ對し、それを何とか書き記すので、これは全くいらつめ方の御想像次第です。

作は

歌曲ならば、俳句でも、和歌でも、今樣でも、唱歌でもまたは詩（今度から之をも加へる）でもよし。

文章ならば、何の文体でもさしつかへなし。たゞ一千五百

字以上を忌む。

歌曲、文章ともいづれも狂体を忌む。

原稿は廿七字づめで、字体を明亮に書くこと。

原稿状袋と本紙とに双方とも宿所姓名をしるすこと。

以上の制規に從はぬものは悉く沒書。

〆きりは　十月十五日

雜纂

米國婦人職業細況

目下米國婦人の職業に於ける地位は意外に困難な姿になッて居ます。　通例の旅人はわづか一月か二月の滯留の間にあれも是もと觀察するため自然目の一般に及ばず、誤りの事實をばかり傳へます。　これら旅人が目に觸れるのは中等以上か、社會の表面だけで、それゆゑその下等および裏面の觀察は無く、それがため喋々と褒めるのを主とするばかり、更に何の充分な事實も持來しません。

米國にハとんと至るところ無職業の婦人の居ぬ處は無いありさまで、まさかに國を離れるのはつらし、さうかとて夫も得られず、金錢も得られず、その間に彷徨て居るのがほとんど無數です。　で、物價の高低の理により、にうよるくとか、わしんとんとか、その外にもすこし繁華の處にゐる婦人は多少正金を得られる職業をも持ちますが、田舍に至ッては全く左樣は行きません。　そして婦人がこの無殘な有樣にあつて居る、その原因を何かと探るに、他に一二ありますが、まづ婦人には職業の熟練が概して乏しいといふところにあるやうです。　他國は知らず、米國婦人ハ隨分一人で十五六の職業を知つて居るのも少くない、その代りに一つの事業に深い腕をば持たぬ、これらでしやう。　で、またこの婦人は相應に學校をも經たもの、それでどうして斯うかと更に深く尋ぬるに、全くその原因は女學校の制度にあるのです。

これら婦人は大抵十七歳まで學校に居ますが、さて地方の學校はすべて教科が普通學であるばかりで、一事業の深い研究は卒業して後の本人の才不才にまかせてのみあります、あはち言ひ換へれば今日の日本の一般の女學校の學制とほとんど同じです。　それでまた繁華な處には高等科を置いたのも有りますが、概して言へばそれもわづかに文學や宗教に止まつて、他の實際の益に立つ方の高等科はまことに稀なもの、それのみか、その高等科ハ授業料も割合に高いです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地方の學校の授業料は安い、都の高等女學校のは高い、そして一般に富んだ人ばかりが學校に入るのではない、これらの事情からして僅に安い方に滿足——しないにしろ——して卒業を爲るのでせう。それ故にこの卒業ハ言はゞ人に對して肩身をつくろふだけ、「妾は卒業しました」と言ふだけです。布も及ばぬ立派な卒業証書はその化粧函にあつて始終ゞ水に咽んで居ます。が、その証書が充分の子を育て上げる益に立ちません。そればかりか、婦人の性質として感情的の物を好む、すなはち小說をば愛讀して寢食をも忘れる位、洋燈をつける手をば持たずに、「すとオぶ」の口を開いてその火影に小說をうつして讀む目をば持ちます。で、時間をばいたづらに費す、それだけならまだしも。害はなか〳〵こゝに止まらず、小說を讀む人がいつか小說に讀まれ、小說の中にある完全な、理想の眞人を空中樓閣に安置して、更にその他をかへりみず、それに伴つて自身をば完全な婦人の標準の點まで崇めて、それを自信と考へて信じ、終に嫁期をさへあやまります。で、飢餓の敵にはかなはず、安教師ぐらゐに出る、出れば出たで一層理想の眞人を描く、—描き足らずに一夜づけの小說著作、これがほとんど多いです。で無ければ眞人をたづねて父母の家に居て母の手助をします。が、よく料理の出來るのは「びすてき」か、湯出芋ぐらゐ、よく縫へるのハ人形の衣物くらゐ（人形は仕立屋に向つて着物の着よくいのを訴へません）、よく彈けるのハ「ぽるか」くらゐ、よく書けるのは暗の夜の烏くらゐ、よく作れるのは枯れかゝつた花簪くらゐ。これが何になりましやう。食へなくなるやうに學問をしたのです。自然に放任されて馴育た母親の方がはるかに物慣れて居て、それゆゑに母は娘を「學校へやつた甲斐が無い」と責める、責るれば唇を薄くして「高等教育を受けさせて下さらないから」。棒でも挺子も動かず、その癖、學校で寄宿して居て醵金で買食をしたり、賄退治にず麵包を二斤食べたりした習ひの失せず、母親の小麥の勘定を爲直すどに詰込て、「だから妾はローンテニスが上手のだわ」。料理にしろ、裁縫にしろ、小說の講釋にしろ繪畫にしろ、挿花にしろ、乃至「ろオんてにす」にしろ、ど

れでもその一つに通達さへしたならば神は財囊を緡いて待ッて居る、それをば些しも顧ません。　これらがはとんど普通の有様、後から生まれた弟の方がいつか郵便の配達などに為ッて姉の化粧品を買ふ金の金主となります。

すくなくもにう　いんぐらんどで　良人の無い婦人は有るのより多く、まつさちゆせつでは婦人が男より七萬五千人多いです。　それゆゑ、いきはひとして婦人がみづから生活の工夫を為なくては為らず、すなはち彼是と工夫に工夫をした果は終に婦人職業の數をして前時代よりは比較の外多くさせました。　前時代で婦人の職業といふのは裁縫、看護、料理番頭くらゐでした。が、近頃の米國華盛頓府職業統計書よついて見れば、おどろくはど！婦人の職業は三百四十二種類よなッて居ました。　その中には陶器の畫をかくのもあり人の手紙を書くのもあり、編物とするのもあり、帽子を編むのもあり實よ千差萬別です。

それですこし心のよくはたらく婦人は早く氣の高い事を心から捨て、あつはれ一つの事よ完全な熟練を得て、充分高い賃銭を得やうと思ふ外他事も無く、終にこの殊勝な心掛で工夫するだけあッてそれがため何うか角か取付くことが出來るやうに為ります。　それ故に一方から見れば氣ばかり高くて朝寝と踏舞よりほか出來ぬ女王も數多いことですが、またそれ相應よ殊勝な氣立のも有ります。

ある宣教師の妻君が、その良人よ死別れて、後よは十三を頭よ四人の男の子を殘され、はたと生計よ當惑しましたが、目前飢餓といふ大敵よ攻められては勇氣も出、家の側よ生へて居る野の草花を子供たちに取らせて花束をつくり、それから停車場へ行つてそれを賣りました。　何がさて、見るよは足らぬ野花ながらさそがに取立の活々した風情も愛らしく、或は帽子にかざし、あるひは胸にはさむため、乘客の男女になか〳〵賣れました。　で、これよは妻君も勢が付き、それからは是で活計をどうにか角にかつけるやうよ為りました。

このやうな例はいくらも有ることゆゑ一々は擧げませんが兎に角生計のために婦人が注意をめぐらそ事は大凡このとはりです。　で、その職業よも職工場へ通はなければ出來ぬのと、家よ居ても出來るのと二つあります。　しかしながら通

常どうしても前の方が賃銭は多くて後のは左様でありません後のが前のよりも多い賃銭を得るやうなのは稀なことで、もし有ればその仕事ハ六づかしい方、人の爲し難い物に限ります。　獨身で良人の無い婦人よも子供の有るのもあり、また無いのもある、それにより子供のある方は多く後の方を撰んでそして子供よもはたらかせ、無い方は自由自在何處へでも飛んで行きます。　が、悲しいことよは實際これら飛歩く婦人は初め優しい德をそなへて居たにしろ、その內に世に揉まれるため大抵は不德の婦人よなつて、間々社會一般の害を爲るやうな事も有りまそ。

まづこれらが今日の、文明の米國婦人の一般の狀態です。善惡の評をば言ハぬ事として唯こゝには公平よ狀況を書記して見ました。

烟草をきらふ文學者

近着の英國の雜誌よ烟草をきらふ文學者の事が載せてありました。　英文學史の著者ていん氏は紙卷烟草を吸ッたゞめ大に懶惰よなッたと言ッて烟草を排斥し、佛國の有名の小說家ぞら氏は矢張り煙草が腦力を弱めることを云ひ、ぢゆまも亦これをいやしみました。　これら近頃の文學者はそれ〴〵故よ煙草よは敵です。　が、思ひまはせば一二年前の事、やハり外國の新聞か雜誌よ古來の文學者はいづれも煙草の熱愛者といふ事が出て居て、その例としてばいろんなどをも引いてもありました。　して見ると、どちらがいゝのやら、わるいのやら、もと〳〵話か一局部の人を種よつかッた事ゆゑ唯この事實は寔の眠りざましになるだけの事です。　が、これよ因ッて今現今の吾國の文學者で煙草をどの人が飲んで、どの人が飲まぬかと調べましたら、まづ左のとほりです（曖昧なのをば省く）。

森田思軒、矢野文雄、坪內雄藏、長谷川辰之助、紅葉山人、須藤南翠、管了法……………右が飲む方。

饗庭篁村、依田百川、內田不知庵、さがのやれむろ……右が飲まぬ方。　そして飲んでも、飲まないでもと言ふ勝手なのハ山田美妙齋。

以上あらましは此のとほり、其他德富猪一郎、高橋五郎、巖本善治などの諸氏は例外　いづれも飲まぬのは無論です。

外國婦人間喫煙の流行

右のはなしと同じやうなのは近頃外國婦人間に煙草の流行しはじめたことで、現に露國のもすこうを主として其他露國一般婦人は多く紙巻煙艸を吸ひだしました。米國でも同様の始末で、くりぶらんど令夫人は宴會の時、來臨の貴婦人に咖啡と紙巻煙草を出したとの事でそ。一方に於て禁酒同盟會だの、何だの、すべて肉慾節制の團結をつくッて居ながら一方からは又それを打ちこはす事をして居るのは何うした事でしやう。鳩は清淨なために天女に伴ひます。不清淨がてわッて他の不清淨な男子を責められましやうか。

馬鹿箇條書

どういふ人が馬鹿だらうとある人が一人の滑稽家にたつねましたら、滑稽家は斯う答へました、——

舞踏會から弊風が起ッたと責めるもの、令孃を寄宿させてそして令孃が德をやぶッたとて怒る父母、海水浴に娘を一人でやる両親、批評を受けて喜んだり怒ッたりする著述家……

○○○○○

ちやァちる令夫人の露國日記の内

露國婦人の狀況

英國の政事家らんどるふ　ちやァちる氏がいつぞやから露國へ漫遊して居たのは世の知るところで、同伴の令夫人は露國の狀況を筆記して日記をつくりました。そして其日記の中に露國婦人に就ての記事が有りましたから拔萃してこゝに載せます。

ちやァちる夫人の言葉に因れば「大抵の露國婦人は化粧室で紙巻煙草を吸ふのが癖で、そして面倒な諸儀式の苦痛をこれて始めて發します。露國婦人はよく各國の語に通じ、しかも多く書物を讀んで居るため、交際には甚だ愉快で、ろんどんの息詰るやうな霧の中から來た身には一層いゝ心持がします。これら婦人は身を粧ふのに中々巧でそ、が。佛國風の淡泊した方よりむしろ獨逸風のしつこい方を好みます。露國の婦人はこれほど色々の美德を持つ、それで進取の氣象に乏しいこと、これがもつとも不思議です……」

象の記憶力

動物學者だらうゐんに聞かせたいと思はれる事は象が記憶のいゝことで、獨逸べるりんの動物園であッた出來事など實に人も舌を捲くほどでした。　ある日べるりんの動物園に數人亞弗利加の黒奴が來て見物しましたが、それらを象は見るや否や、聲を立てゝ嬉し泣きに泣いて、それのみか足をおどらし、さながら親にでもあふやうな体でした。　それから黒奴にその象を飼つたことでもあつたのかと尋ねると全く左樣では無いとのおもむきで、それに因り考へれば、全くその故郷の人に遇つたので思想の聯絡から故郷をおもひ出し、それで嬉しさに泣きさわいだのと知れました。　人の顏に見覺えはないながら黒い顏の色を覺えて居るとは實に聞いても涙がこぼれる、可愛らしい事です。　で、象があまりさわぐため墻がほと〳〵やぶれさうにさへなりましたので、それから黒奴には譯を聞かせ、終にことわつて歸らせたほどでした。實に不思議とも言ひたいほどの事ではありませんか。

最上小說十種

文藝美術に於てハ屈指の「あたらんた」雜誌で此頃讀者にその好む小說十種の指名を求め、やがて集まつた上でその中の多數を數へて掲げました。　すなはち、それらは、

一　じェえん　あうそてん女史のぷらいど　あんど　ぷれじゆぢす。

二　うをオたア　すこッと著の　あいばんほオ。

三　しやアろつと　ぶろんての　じエえん　あいあ。

四　さかれいの　ぷアにてい　ふエいあ。

五　がすける夫人の　わいぷす　あんど　どオたアす。

六　ちやアれす　ぢけんすの　でエびつど　かッぱふひるど。

七　えりおつと女史の　あだむ　びいど。

八　ちやアれす　きんぐすれいの　うゑすとわるど　そう。

九　ゆいんぐ夫人の　じやかねエぷす。

十　やんじ孃の　えいあ　おふ　れッどくりふ。

日本に於ては如何でしやう。　愛讀のいらつめ方御なぐさみに十種御えらびになつて御寄送を下さいませんか。　來る十月十日を〆きりとし、その投票をかゝげるのも秋の寂しいところ一寸一興にありましやう。日本で出來た小說なら何でも宜しいです。　十種なければ少くても宜しいです。　投票

に宿所姓名をくはしくおしるしの上あきらかに御書きおくりを願ひます。 いつはりかざるなどの事なく、たゞ赤心御好の物を御書きくださるのが望ましうムいます。

淑女が流行言葉を用ゐる可否

新參の流行言葉を得意顔になッて淑女が用ゐられるのは淑德を損ずる事の隨一です。 雜誌でゞ見るいらつめ方の中には聞くに忍びぬ流行言葉を用ゐる方もありますまいが、下等の婦人には隨分あるやうです。 これは今日の事でそ、過去の事でありません。

實情からでた歌

「そり〳〵は有らばと思ふなみだかな、親のいさめの今ぞ知られてと」いふのは實情の歌として人の口に膾炙して居ますうれはと同様、侍小式部内侍が末期に「おやにさきだつ道を知らねば」と詠んだのもまことに千載の下涙をもよはす情致です。 が、後世に至り、それはその情でまさつたものが更に出ぬ、それがよほど不思議と思つて居る內に、この頃一つめづらしいのを知らせてくれた人が有りました。 その歌はすなはち、

「相槌にはゝをたのめばきぬたよりよわる腕の音ぞかなしき」と言ふ歌で、しらべは元より取るには足りませんが、しかし其孝情の澤々として溢れて居るところが何うして云ひつくせましやうか。 てにはに於ては申分の無い和學者先生の燒直し歌よりわれ〳〵は遙に、むしろ、この類の實情から出たのを愛しますいや敬んで讀みます。

寄書

暦法の質疑　　司馬あや子

皆さま御存じの如く閏年の三月は二十九日ありますが、之に反して二十四日の閏日だと言ふ事は御存じの方があまり有りませんやうに思ひます、さて御尋ね申したいのは閏年の二月二十四日に生れた人、又二月二十四日に生れた人は四年毎に誕生を祝ひますか。 いかゞ。

右は廣く答案御つのりを願ひます。 その譯はいさゝか妾ども同様學問を修る御方の御ためにもなからうかと存じまして。

望江南の種の分與を報ず

私方に望口南と申す草があります。 この草は蜂、蝮、蛇などに噛まれた時、其傷口に葉の絞り汁を付ける時は直に痛を去ります。

いらつめ方もこれを御庭の隅へ御植えに

あッて置けば飛んだ御用に立つ事でしやう。因て右の艸の種を御望みの令夫人令孃方は郵劵三錢私方まで御送付ありますれば早速進上いたします。

右　長門國阿武郡奈古村　案野たみ子

案野女史の御注意記者も喜んで賛成いたします。が、やがては御植込になるいらつめも有りましやうのに其培養法も不案内では不都合です。よッて御手數ながら來る十月五日までに御記の上御送付願ひます

右　いらつめ記者

答書

前號の疑答に左の方々から答案が來ましたから其儘を載せ御厚意の御禮として當方のいらつめを一題につき一部づゝの割で差上げます。

問（イ）蜜柑を翌年の春まで貯へる法……………木島絹子

問（ロ）蟻の座敷にのぼらぬ法……………司馬絢子

問（ハ）手のひらの豆を去る法……………司馬絢子

答（イ）に屬する分

牛竹を切り、一方に節を置き、一つ一つに蜜柑を入れてよく口を蓋ふ時は永く保存に堪へます。もし蜜柑が竹の中へ入らぬ程の大きさならば、蜜柑を柿の乾いた葉で二重三重に包み、空氣を防ぎ、藁で結びつけて置くのが宜しいです。この二法は妾が試みて實地好結果を得ました。また杉の箱の中に竹をわたし、蜜柑を糸に釣るし、箱の蓋を堅くして空氣のあまり通らぬ處へ置けばよく保存に堪つます。たゞし以上三法とも蜜柑の熟し過ぎたのはよくありません。

右……艸野菊代

箱の底に細かく切つた藁を布き、その上に互に觸れぬやう注意して熟し過ぎぬ蜜柑を並べ、又その上に藁を布き、蜜柑を並べ、また其上に藁を布き、上に蜜柑を並べる、かうして一番上は矢張り藁で掩ふと、必らず翌年の春まで保ちます。

右……中川渉

是は多年實驗した法です。其法、熟し過ぎぬ蜜柑を丈夫な、古い米俵に入れ、肌と肌と觸れぬやうに籾糠で塡め、上を三ヶ所堅くしめくゝつて土藏の天井に吊して置けば翌年の春までたしかに保ちます。

右……案野たみ子

丈夫な桶に糠をつめ、其中へ熟し過ぎぬ蜜柑を觸れあはぬやうに埋め、蓋を密封して置くのでそ。

右……撫箏女史

淺く、平たい函の中に觸れあはぬやうに蜜柑を入れ、砂で埋め、其上にも五六分の深さに砂を盛りあげ、盛りあげては又蜜柑を置き、更に上の蓋を密封して置けば夏でも大丈夫保ちます。が、砂は穢いのや、濕つたのを用ゐてはありません。海か川で取ッてから少くて二三日は日に晒し、更に日陰にひろげてその濕氣を去り、それから用ゐるに限ります。この法は蜜柑に限らず、橙々、ざぼん、金柑などに行つても宜しいのです。たゞし熟し過ぎたのはいけません。

右……得手樂人

右の外、愛菊女史、六逸漫士、日高氏の三君からも御答案が有りましたが、前のと大同小異ゆゑ省きました。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(ロ)に屬する分

蟻の上る椽敷の椽の下へ若芽(海艸)を置くのは第一の良法で、すべて蟻は若芽を嫌ひます。 右……艸野菊代

蟻の往來する處に單舍利別(白砂糖六十五分を熱蒸餾水三十五分にとかしたもの)を硝子瓶に半分入れて置く時は蟻は甘味に引かれてみな其中へ落ちて死にます。

右……中川渉

藁灰を蟻の往來に引けば蟻は上りませんと聞きました。

右……撫箏女史

蟻は苦利を嫌ふゆゑ、蟻の往來に苦利を引けば防げるとの事でそ。 苦利は鹽のシメミです。 但し實驗はまだ爲ません。

右……日高氏

是はわたくしが實驗しました。 椽の下へ煙艸の粉を蒔いて置くと蟻は防げます。 右……琴水女史

椽の下をよく掃除し、生石灰、木炭粉、この二種を等分に混ぜ、厚さ二寸ぐらゐに布いて置けば蟻が防げるのみでなく衛生上濕氣をはらつて至極よろしいです。

右……愛菊女史

川に屬そる分

煙艸の吹殼を飯糊に交ぜて手の豆につけると豆はたやそく取れます。 幾人にも試みましたが皆利きました。 また畠に生ずる半夏(ハブこ)の根を碎き、それを付けても宜しいです

右……草野菊代

豆を針で刺し、其中にある水氣を絞りとり、後を硝酸銀で燒くとまつたく取れます。 右……中川渉

豆を指尖でそろそろ撫でゝ居ると豆は次第に小くなり、果はやがて無くなります。 もつとも安全で、もつとも簡略な法です。 右……日高氏

板に付いた漆を落す法　草野菊代

いらつめ第廿五號兵庫無敵育娘さまへ御答の中、第六、板についた漆を去るには極めて薄い硝酸で其處を拭ふと奇麗に落ちます。 この、これは偶然に知つた方法です。

通信問答

心得第一、 御問合の事が其答を載せたいらつめより六號以前までの問ふあればそれには委しい答をせず、唯ゞその在る處をのみ言ひます、尤も其以前に屬そる分は更に委しく言ふのは無論の事です第二、 御問合の文章ならびに文字は成るたけ明かに書くこと。

大崎英子さまへ　(一)衣服についたペンキは付くより成るたけ手早く石炭油をつけ、筆の尻などでかろく叩くのが宜しいです。 直に取れます。 (二)ニキビを豫防するのもいらつめ第廿四號琴水女史への答の色を白くそる法で宜しいです。

高輪……女史さまへ　(一)酒を飲んで居ねむりの出るのは醉ッたからです。 醉をさます法はいらつめ第廿六號家政内にあります。 あんもによわがあければ柿、または干柿を御食べなさい、醉は醒めます。 (二)蚊を驅除する法は前號に出て居ました。

Iratsume Sweet Reader. さまへ。　一 源氏物語

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は四圓五十錢、つれ〳〵草ハ五十錢、榮花物語は一圓前後、枕草紙は七八十錢ぐらゐの物です。(二)近眼をふせぐには常に遠い處を見詰めるやう〳〵に目を慣らすより外手段は有りません。(三)和歌獨習には言葉の千種、ふるの山ぶみなどが宜しいです。いづれも和書を賣る本屋にあります。

喬木哲女さまへ　洋服裁縫の細に書いてある、最上の書物はまた有りません。

相田菊子樣へ　縮れ髪を直す法は第廿二號通信内にあり升。

錦貫よし子さまへ　(一)御同樣の御注文が多くありますから文章删潤の規則を改めました。(二)空氣のよく乾いた時炭を取り、これと同じ目方の金類を求め、天秤をつくって其一方に炭、一方に金を置けば雨の來る前には炭が下り、晴れる前には炭と金と次第に平均して行きます。これが簡便な晴雨計です。(三)蝸牛をつぶし、その汁を庭石に塗り、怠らず毎日其處へ水を注げば見事な苔が出來ます。

細川操介孃へ　(一)沃度加里は首から上の病にすべて利きます。(二)日に燒けたのを落す法はいらつめ第廿六號通信内にあります。この法を行って、毎々言ひまする、硼砂の微温湯で顔其他を御洗ひなされば乾度効はあります。(第)二十五號の通信欄岩崎八重子さまへの答の法は脱けた髪を恢復させるにも有効です。

中藤かずえさまへ　(一)懐妊避妊の時期の心得方は第廿六號に有ります。(二)朝食前二十分ほどの頃醤湯を猪口に一杯づゝ、飲むのを怠らなければ胃病は預防が出來ます。(三)布の染色をはげぬやうにするには明礬水に浸すのが簡略な法の一です。(四)漆に冒されたのには蟹をそりつぶして其汁を塗るのが宜しいです。(五)第廿五號通信内にある毛生藥の法は一切何處へ付けても有効です。

案野たみ子さまへ　(一)眞菰の灰は手製でできます。即ち眞菰を成るたけよく枯らし、瓶に入れ、蒸燒にするのです。蒸燒が御面倒なら只燒いても宜しいです。(二)英語獨習には東京神田錦町、國民英學會(イーストレーキ氏ノ學校)から出版する雜誌が宜しい方です。

旭さまへ　(一)衛生、家政の事が詳に書いてある書物は女學雜誌社出版のひめかゞみです。(二)前の錦貫よし子さまの第一を御覽なさい。

ちとせ孃さまへ　(一)眼の養生に掛ける目鏡は棕色即ち薄墨色に限ります。これは再應充分に取りしらべて次號に出します。

芝一女生さまへ　動詞變化が簡略にわかるのは中根淑氏の日本文典です。

西村照子さまへ　(一)ハンドコロンをば賣捌く處が有ります。當號の廣告を御覽下さい。(二)ハンドコロンを土臺として色を白くする藥製造法は廿四號通信内にあります。(三)疊にインキが付いたらば其上へ蓚酸をふりかけ、熱湯をかけ、強く布で拭ふのです、成るたけ手早く。(四)晴雨計かんざし製法は次號

(五)汗はとめぬ方が宜しいです。

草野菊代さまへ　(一)當號の廣告を御覽なさい。(二)適度に運動をし、脂肪質、糖分の分をなるたけ扣へれば自然に身体は

宜い加減に痩せます。藥など飲むのはよく有りません。(三)臉、燒を治すには毎朝カルヽス泉塩二十グラム(五匁三分)を茶碗一杯の温湯に溶して一ヶ月ほど服用なさると取れます。はじめは下りますが心配は無いのです。是は第十六號にありました。

三浦せん子さまへ　(一)火傷ではげる處は栗のイガで突いて置いて、其處へ前の中藤様への答の第五の法を用ゐれば毛は生へるとの事です。(二)燒塩か舶來塩で漬けて密封して置けば大抵櫻の花は色もかはらず保つものです。(三)曼朱沙華(俗にいふ「シブトバナ」)の根をすりつぶし、それで紙を張ると決して離れぬとの事です。(四)食パン製造法は短く言へませんから次號の家政に出します。(五)、(六)は知りません。

小林安子さまへ　毛を拔去る法は左の通りです。石灰水六オンス、雄黄(繪具の名、英語でオルピメント)半オンス右をねりまぜて望むところへ引くのですが、水を交ぜて極めて薄くするが宜しいです。が、塗ると忽ち皮膚は燒けます。其處を見料らひ、竹の薄篦で剃ると全く落ちます。この、可なり危險な法ですから、もし御試みよなるなら一先外の場所よ試みてそれから爲さるが宜しく、で無ければ外科醫者よ御依頼になる方が宜しいです。

誠よ餘白が切迫して御通信よ殘らず答へられぬ段、次號からは一工夫しますから何卒今度だけ御許を願升。

疑問　煙管とキセルと云ふ意味、秋月ふみ子●鶏非戸流蔦餅製法、相田きく子
●燕羊羹製法、相田きく子●油虫を除く法、紅幽女史●以上の法をたしかに御答への方にはその御答を載せたいらつめを一部進上します。御答は十月七日〆切

餘興

賞品は五十錢以上の匂ひ袋一ッ。

新謎題

(一)斜方形の謎。第一はどの物よもある物。第二は源氏の巻の名。第三ハ近頃の有名な小説。第四は西洋家具。第五ハ身体の中にある物……右 大阪 舶ちよ子
(二)考物。東京の二百十日は無事でした(獄名二)……右 本郷 得手樂人
(三)あの御方は近頃御病氣との事ですが」○「へい、弓の中がわるいとの事です」○皆さん弓の中とは何の事でしやう。……右 大阪 舶ちよ子
(四)考物。宮島の沖のけ〻きはたくひなし(十二支の中五)右 東京 みつ子
(五)私の名は立派ですが、常よあつい思ひをし、外の物よ乘られ、足へ人並より多くあつても掃除の時などで無ければ部屋を出られません。茨城 坂本はる子
(六)左の形をどう讀んだら意味が通じましやう。

やまーみづ
ばななたも
れも　まれ
もつきなば
りちろしい……右 群馬 三五屋つ月

(七)私にはメもハもヲも有つて、人を乘せて遠くまではきますが、馬や牛ではありません……右 同 上

右七題皆答の方には匂袋、六題解答の方よはいらつめ一部、いづれも進上。
解答用紙よ認めてない物ハ沒書。御投寄の新謎を揭載すれハその号一部進上。
解答御送付は十月五日のしめきり

第廿六号餘興新謎の解

(一)人の身よ出來る「マメ」は後よ「タコ」になります　(二)寺(十一寸ハ寺)
(三)煙草　ツバ、空氣、(四)五常の道　(五)玉子　(六)蛋　(七)鉛筆の心
●皆答者　豐田しげ子○林まん子○高橋さん子○青森さみ子(匂袋一ッ呈上)
●五題以上解答者　服部吾一○仁科美哉子○早瀨文雄○高木硯樂○津田玉子
○橋瀨さん子○西田飛佐恣○小池峯子○碓井○田中瀧瀯○小林いせ子○小川信逸
○福田常○中川滋○中野宗齋○清野○小林きよ子○得手樂人○欅陰子○松井ふく
○秋鶴二○相瀨ふみ子○橋本今野○山邊居士○柄瀨舫作○中村へる子○松尾久子
○月時たね子○七重野まさ子○牧野さき子○田舍娘○山田ふみ子○日高鱗三郎○
福田太郎○奥村みちゑ子○伊豫たかね子○風間つる子○長谷川しげ子

廣告

地方愛讀者中雜誌代價延滯致居候分は至急御拂込被成下度候最し等閑ょ御捨置被成候はゞ無是非紙上よて御催促可申上候

成美社會計掛敬白

新發明銅刷幻燈映畫製造廣告

從來の幻燈板は悉く寫眞を用うるより從つて價も廉ならず、且その圖畵に至りても遊戲用の如きは時に卑猥なる物あるを免かれず爰を以て幻燈の利を知る者と雖も猶一顧を費すの傾あきょあらず小生多年之を憾とし銅石版鏤刻の傍之が研究を怠らざりしょ今回やうやく銅版によりて幻燈の玻璃板ょ文字圖畵を隨意印刷するを得而も其價は從來幻燈板の二分一ょ超えず其細密あるに至りては銅版の事なれば素より寫眞の及ぶ所ょあらず今之を製造中ょて不日取揃へて販賣するに至るべく即ち豫告此の如し細條ハ更ょ廣告すべし希くは大方の敎育家及び慈親諸君發賣の上は先一組を購ひて其眞否を試驗せられん事を。

特許銅石版彫刷所傳神樓主

日本橋區大傳馬塩町十番地

中川昇

西洋水白粉 肉色 薄ざくら

是は弊舗新發明の水白粉よして舶來の原品と雖ども之ょ一歩を讓る程の眞品ある上其効能の著しきことは常御使用になれば御顏のキメを細かよし血色をさはやかよし優美ある光澤を出さする等極めて衛生上に有効の品なり

西洋白粉 肉白二色 玉椿

是は佛國博士某氏數十年研究を試し元質の眞品へさまざまなる花の香と混じ精製あせば普通鉛製麁惡の白粉に異り最も衛生優美一用兩得の佳品とも言べき新發明の白粉なり

婦人 束髮用 薔薇水

是は弊舗ょ於て多年經驗の上精製したる眞水なれば御使用あさるに第一髮の艶を出し男女とも常ょ頭髮に散附するょ惡き匂を去り汚れ垢染る事あく何時洗ひ髮の如くさらりとして衣服ょ觸るゝとも更ょ染つくの患なく芳香馥郁としてあたりを拂ふ實ょ善眞無比の香水なり

東京神田區萬世橋外

製造本舖 紅製堂

伊勢屋惣兵衛

伊勢ざくら

是は弊舗専賣の御顏白粉家傳の眞品にて其好評の有るは貴婦人令孃の知召す所なれば爰に之を喋々せず

東京神田萬世橋外

紅製堂

國のもとゐ

國のもとゐ第六號目次（九月一日發兌）

◎論說

○空氣の話（續き）　ドクトルオフフイロソヒー 久原躬弦君

○身体の發達ょ就きて　醫學博士 高木兼寬君

○光りの話（續き）　醫學博士 緒方正規君

○兒童の心志の誘起するょ就きて父母の注意を促す　菅了法君

◎小說

○園の梅 第五枝　櫻塘學人

○新造物者 第四篇　瓢乃舍主人

◎家事

○西洋洗濯法（續き）　尾中藤太郎君

○熱病の退治　坂本重範君

◎文藝

○風のおさ（續き）　中村秋香君

　　鐵腦生君

○東遊記　渡邊政吉君

○日本の歷史（續き）　木下邦昌君

◎投書

○諸孃へ御相談　榎本さく君

◎雜纂

○英國風俗の移り變り（挿畫）○文部省の褒賞書○世界第一の風琴○日本ょ於ける英人○家康江戸入城の三百年目○日本のソクラチース○戸内遊戲法○菅了法氏の世變論○矢田部氏の談話○禮法一斑○地理總論○製造用の植物○新刊批評○東京高等女學校改正學科課程表

◎挿畫

○講堂演說の圖　耕濤女史

○佳人書狀を認むる圖　後藤漁洲

○本誌は毎月一日發行○定價金八錢○六册前金四十五錢十二册前金八十五錢○郵税一册に付各一錢十月以後ハ一册各五厘

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地

興文社

附錄 ○改正全國滊車發着時間表

いらつめ第二十六號目次

明治二十二年八月十五日

●挿畫○少姫讀書の圖●家政○室内粧飾法○床の間の飾方(前號續)○看病法一斑(ナイチンゲール孃述)○アイスクリーム製造法○咽喉の乾くのを止める法○桃の實を冬迄貯へる法○茄子を貯へる法○檸檬糖の製法○酒の醉を醒す法○細い細君●文藝美術○唱歌自然の聲(メレイブラドレイ女史新作)○古歌水風晩來の評(美妙齋主人)○内閣官報局新定送假名法○函谷關そこのけ●批評○國民の友の面影細評(美妙齋主人)●小説○繡鸞鸞第六回(鷄亭飯人)●雜纂○音樂大家モザート氏の傳(夢の屋)○婦人の記者○ロの説(チャーチ女史述)○十九世記雜誌婦人撰擧權を非さするの議○紐育國民雜誌の婦人批評○美術家イースト氏ノ演説○冬でも單を着る●寄書日本風と西洋風との比較(司馬あや子)●通信問答‖ペエあすの石鹼の効能及びその贋造ある事‖脚氣治療法‖瓢蕈に色を附ける三法‖竹に摸樣をつける法‖黒子を去る法‖○爪際の皮の荒れたのを治す法‖ハンドコロン實捌所‖黒子を去る法‖顔の荒れを治す法アザを去る法‖色を白くする法‖顔の毛を拔く法‖砒石の毒否‖絶美の詩‖日に燒けたのを落す法‖縮れ毛を直す法‖世界語の流行‖●近頃西洋で行はれる小説‖蚊を驅除する法‖○懸賞餘興

社告

江湖の淑女君子の中で小説、文章、又は歌曲を作られ、その添削を望まれる時には成美社では左の條規により請求に應じます。(一)小説文章の類千二百字以内の添削を望む人は手數料としていらつめ一冊分の代價を草稿と共に送るべき事(二)小説文章の類千二百字以上二千四百字以下の添削手數料はいらつめ二冊分、二千四百字以上三千六百字以下の添削手數料はいらつめ三冊分、以上皆此の例で推すべき事(三)歌曲の類八百字以内の添削手數料は小説文章類の千二百字以内のに同じ事、送り方も同じ手續を履む事(五)歌曲の類八百字以上千六百字以下の添削手數料はいらつめ二冊分、千六百字以上二千四百字以下は三冊分、以上皆此例で推すべき事(六)手數料の外に著者は草稿返却に要する郵税を成美社へ宛て草稿と共に送る事(七)草稿領收して返却する迄の時日は小説文章千二百字以内及び歌曲八百字以内が三日間、小説文章千二百字以上二千四百字以下及び歌八百字以下が六日間、以下皆この例で推すへき事(八)前條の日數は草稿到着の日を數に入れぬ事(九)草稿は淨書、添削の餘地を設けて置く事(九)草稿者都合に因り、成美社で相當の價で求め、いらつめか、或は他の新聞雜誌に出す事も有る事、但しその取捨は成美社の自由にある事(十)添削の目途付かぬ物と見れば返却する事、但しこの場合には手數料をも返附する事(十一)草稿領收證を差出さぬ代り、毎号のいらつめに一ヶ月間領收の草稿の題目を載せる事、但しこの場合に著者の名をば付せぬ事(十二)添削濟の草稿には成美社の添削濟の印章を押して返却する事(十三)草稿は十行二十字に認める事(十四)字數計算へ一枚必ず十行二十字として數へ、決して空白を捨てぬ事但し十行二十字に一枚に四百字以上を記すのをかたく禁ずる事(十五)草稿は一度に何種類送るとも差支無い事(十六)以上の十五ヶ條を著者が履まなかったなら草稿へ沒書にする事

○いらつめ定價、並製一冊金八錢、郵税共九錢、半ヶ年分(六冊)四十五錢、郵税共金五十一錢、一ヶ年分(十二册)八十錢、郵税共九十二錢、別製一冊金九錢、郵税共十一錢、半ヶ年分(六冊)金五十錢、郵税共金六十二　、一ヶ年分(十二冊)金九十錢、郵税共金一圓十四錢府内ハ郵税ヲ免ズ○毎月十五日發兌雜誌價ハ前金ニアラサレハ御送附不申候金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラバ拂渡郵便局トアル所ニ(神田郵便局)ト記シ受取人欄内ニ(神田平永町九番地成美社)ト御認メ被下ベク候又郵券代用ハ郵便爲替ノ無キ地ニ限リ一割増ナレバ妨ナシ見本ハ一錢切手ニテ並製九錢別製十一錢ニテ發送可仕候

發行兼編輯人　山田武太郎　　印刷人　佐野忠吉

東京神田區平永町九番地
發行所　成美社